

682-61



1200501577596

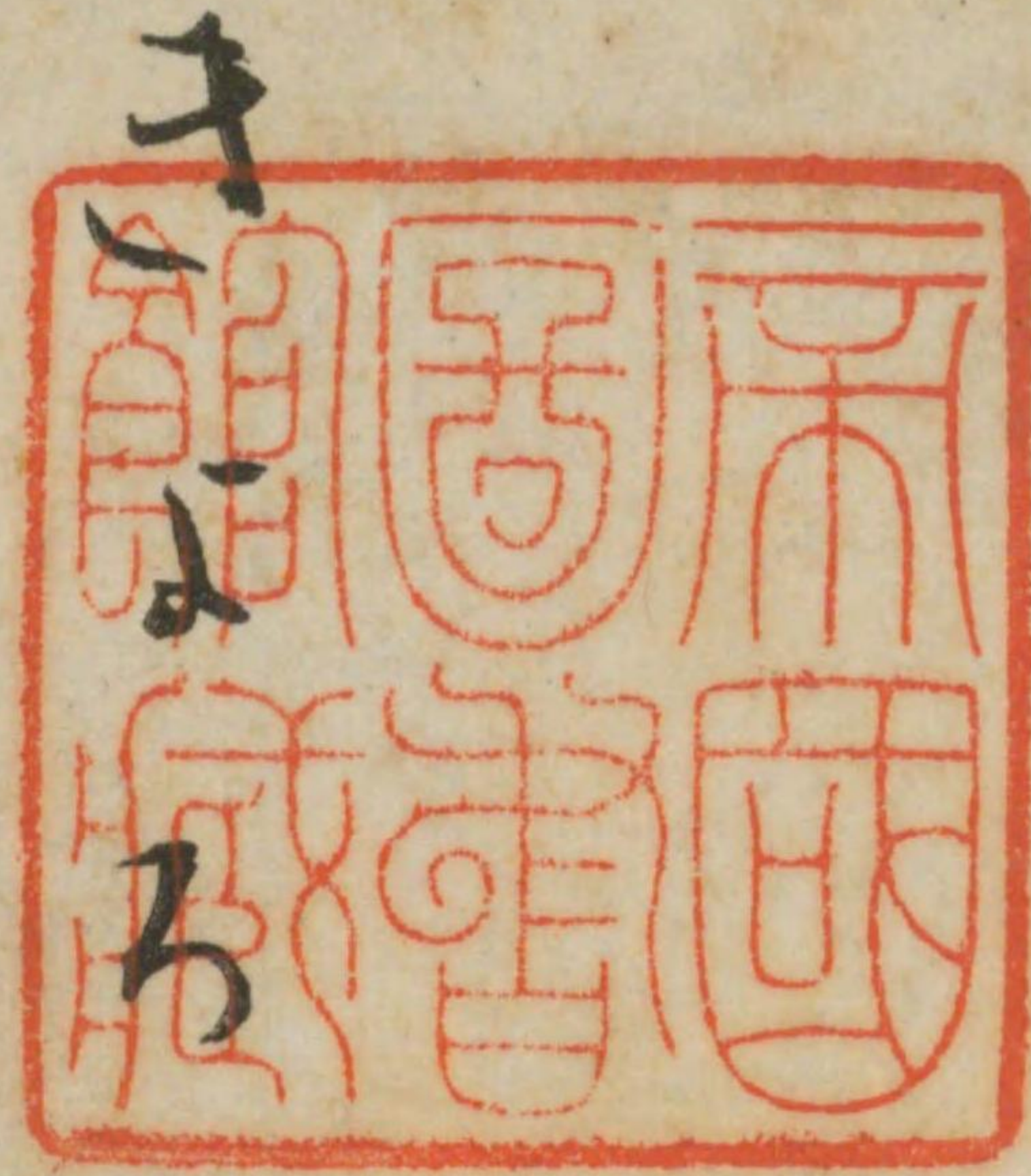
01



複写

27. 4. 25

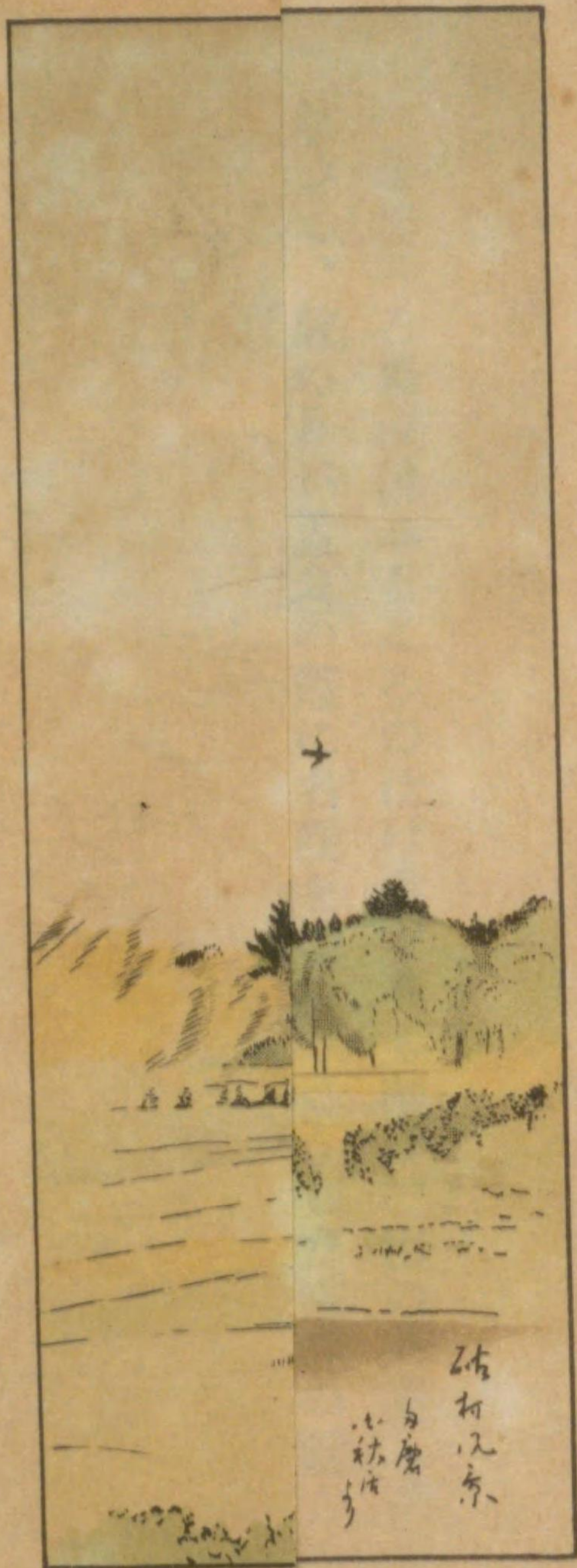
23008
た



り
号

世
尔
社
著
書
地
展
望
社
版







はしがき

682-6 /

きよろろ鶯は謂ふところのほけ鶯、春も闌け、山の若葉も閑かになつて、聲のみが孟夏の霞に名残を惜む。さうした惜春の賦とも、影をあはれとも観てゐようか。

春邦畫伯のゑがく楡の林の葉がくれにも、その聲は姿とくぐる。石走る水のかゝりも匀ふ。

心耳に歎く空の氣色である。

きよろろ鶯ころろ蛙といづれぞや

昭和十年六月

多磨の白秋居にて

著者

きよろろ鶯 目次

序

春の枯野

遷宮奉拜記	三
あはれ熊祭	三〇
湯崗子の墓	三七
春の枯野	四三
哈爾賓小話	五〇
カナリヤの胃袋	五五
破れた手風琴	六〇

剝製の栗鼠

谷中の秋

八三

本格

八三

書齋と星

八六

白秋の墓

八六

庭を眺めて

九

白く耀くもの

一〇〇

白きものの陰影

一〇五

ほうやりとして

一〇五

白い満月

一〇七

父の髯

一〇九

緑ヶ丘風景

一一〇

窓から

一一三

緑ヶ丘の秋

一一三

剝製の栗鼠

一一四

緑ヶ丘にて

一一四

新居より

一一四

小田原への消息

一一五

人間群落の中に

一一五

牧水逝く

一一六

ほう、ぼんく

一一八

機上から

一一六

ある日の日記

一一九

残くして長久なるもの

一二三

筆を惜む
陽春逆年譜

一六
二〇三

季節の臚

I

一月の言葉

二九

ある思出

三三

金と絲

三三

四月の順禮

三四

水路の五月

三五

びいでびいで

三七

七月の飛行機

三九

螢の塔

三三

五浦の少女

三三

十月の廢園

三五

十一月の雀の子

三七

十二月の言葉

三九

II

バン・バン(BAN-BAN)の春

三四

バン・バンの夏

四六

バン・バンの秋

五二

椿の少女

五六

III

昆虫圖譜

六三

白い炎の指さき

六三

水郷柳河

六三

未知の世界	佛法僧	きよろろ鶯	大江の幸若	若葉は <small>ひら</small> 咲く	雪原に遊ぶ	カナリヤ脛る	卵と角笛	養老の熊ん蜂	金魚と緋鯉	すつぽん	蝦蟇と藪菟蓐	猫は女性
三四〇	三三八	三三八	三三三	三三〇	三〇九	三〇五	三〇三	三〇〇	二九九	二九七	二九六	二九五

角無き鹿	狸の <small>爺</small> 丸	狸の <small>丸</small> 丸	食用蛙	蝦蟇を釣る	きよろろ鶯			最初の師	この母を持つ幸福	母の横顔	IV	武蔵野通信	十月の言葉
二九四	二九三	二九二	二九一	二九一				二八三	二七七	二七〇		二六六	二六五

春の枯野

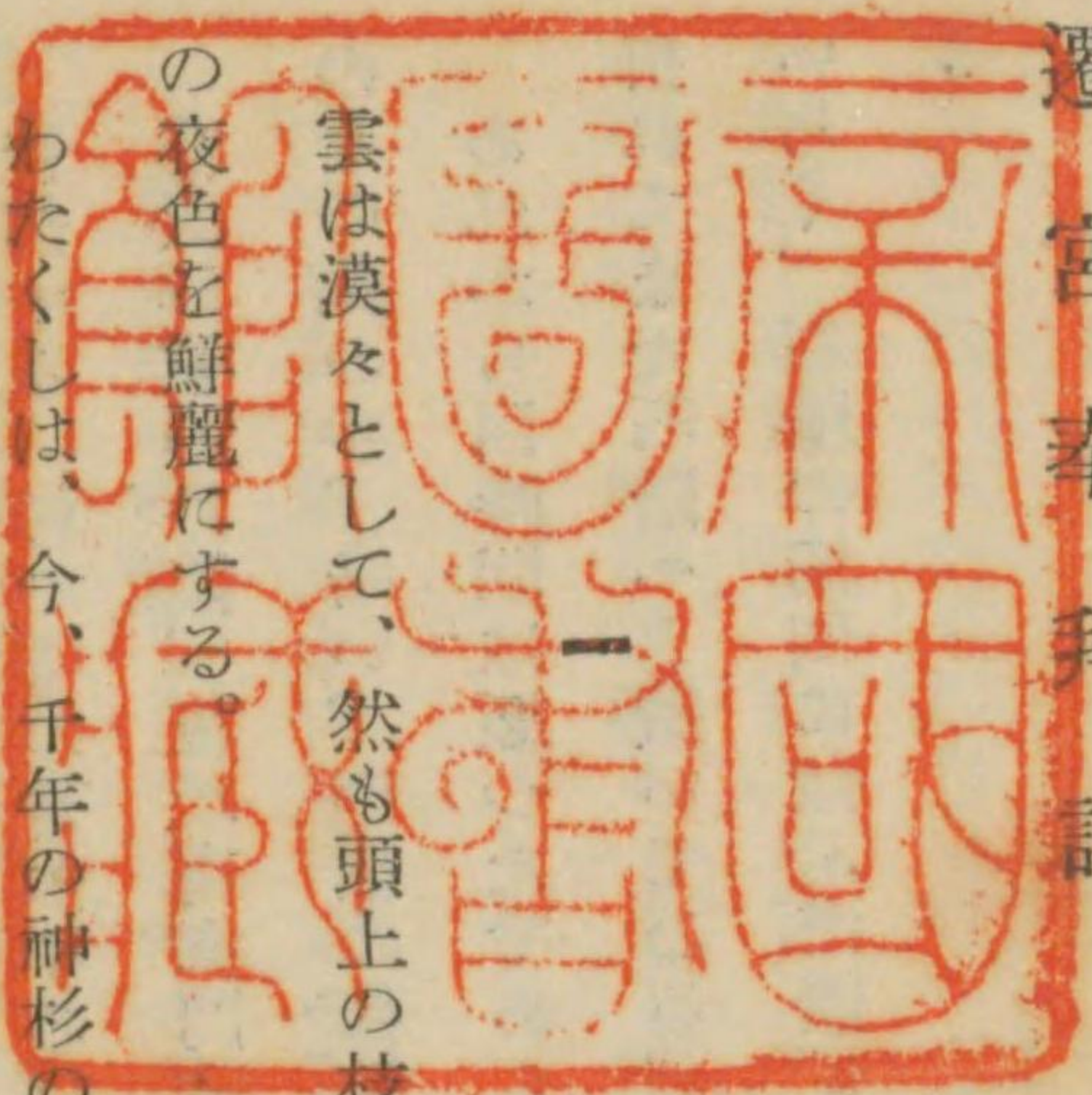


兵	鳥の巢を探る	日本の花	蜺いろの藤	卷末に
三四	三六	三九	三三	三八〇

装幀 白山春邦
背文字 著者

(目次 終り)

遷宮奉拜記



雲は漠々として、然も頭上の枝にある。枝はまた參差として、古蒼、寧ろ眼前にあつてこの夜色を鮮麗にする。
わたくしは、今、千年の神杉の根方に足を拱んで、背中と腰とに新しい蕙の香ひと、しめりを感じてゐる。

太い雫がわたくしの額を打つ。

雨は過ぎたが時折に太い雫がはららと打つ。

杉の梢の雫なのだ。



さきほどの雨に、わたくしたちは蕙を後ろの根方に張りめぐらした。さうして又外のをく
る／＼と巻いて地上に藉いた。

さうしてわたくしはうつらうつらとして眼を塞いでゐる。

音がする。杉の雫の音がする。

皇大神宮の外院、板垣南御門前、廿八級の石階の下、その正面の蕃塀を西に折れる、参道
のその鉤の手、暗い、雨後の御贄調舎を後ろにして、わたくしはよく老杉の下に位置した。
あれから四時間は経つたであらう。檜も新しい雨儀の御廊下がわたくしの前にある。右に
折れてまた石階へと續いてゐる。明るい菊の御紋章を描いた高張が御廊下の向うの曲りに黄
いろく、石階の両側に竝んだ儀仗兵の赤い軍帽と、銃剣の尖とが、また、庭燎の炎に反射す
る。

あゝ、蟲の聲がする、すさまじく森嚴な三本杉、神木中の神木、その老樹と、同じく老樹
の樟と、それ等のつい向うのくらがりの根方で、きり、きり、きり、ちり、ちり、ちりと何

か蟲の聲がする。その樹立を隔て、内院は外玉垣の中あたりにも庭燎が赤い火の粉を立て、
ゐる。きり、きり、きり。あ、何か樂の調べではないか。中重の石壺の版、あの奥の奥の玉
垣の奥の長いあたりのことは、太玉串の奉奠、御祭文の奏申、その他渡御の御儀に移る色々
の準備と奉仕とは、餘りに雲上にあつて地下のわたくしどもには何の知るよすがもないが、
時刻は移る、時刻は移る。――笙だ。笙の笛だ。

出仕の白い影がわづかに赤の下衣をちらつかせて、三人五人と前かがみに石階を下つて來
る。御道敷の荒蕙をさやさやと巻き下して來る。西へ、わたくしたちの前を又敷き流して行
く。後から白布をまた敷きのべて、同じ色の巾明衣の宮掌補がかがんで、西へ西へと消えて
行く。

「かけこう。」

「かけこう。」

「かけこう。」

檜扇を右手に、はた、はた、はたと、左の袖を三度、羽ばたき、羽ばたきした後、かう三度鶏鳴を唱へるといふ宮掌のあの天の岩戸さながらの鶏鳴の儀も或は、過ぎたであらうか。シルクハットの背の高い紳士がわたくしの前を通つて、蕃塀の横に立つた。フロックの襟に赤の徽章をつけてゐる。頭のかか光つた紳士がまた後から通り抜けると提灯を下げた警部の一人から片手で制止されつゝある。

角の庭燎が煙る。こほこほとあちらこちらで咳をする。

と、箒策の音がかすかに沈んだ緑いろに、光つて来る。

遷御だ。

千年の老樹の杉の根方にすわつて、わたくしはこの一時をこそ待ち設けてゐたのだ。

二

その前日、十月一日の朝、やゝ雨もよひの曇と、秋らしい時折の日ざしを仰ぎながら、黄に浮き立つて明るい檜の素木の宇治橋を、わたくしは渡つてゐた。清麗な五十鈴川の水色、

その神橋の向う袂に、枝ぶりも香ひもかうがうしい一本の梅檀の老樹をわたくしは見た。その葉がくれにはまだ薄い緑の實の房がつやつやとのぞいてゐた。樗の青い實の色、わたくしの歌どころがしきりに動いた。

一の鳥居を過ぎて、衣冠に白衣のつゝましい行列に出あつた。御装束神寶讀合の行事を済まして參道を下つて來た奉仕者たちであつたらしい。わたくしは御手洗の水で口をすすぎ、手を清めて、見るからに蒼鬱とした群青の杉の樹かげを畏み畏み上つて行つた。神樂殿、五丈殿の前を過ぎるまでには幾人かの腰のかんだ老婆たちにも會釋した。地方色の微笑まねるとりどりの參詣者たちもちらほらと歩いたり、休んだりしてゐた。わたくしは石階をのぼり、外玉垣南御門の白い生絹の御幌おとぼりの前にすわつた。さうしてぬかづき、深くぬかづき、柏手を三度獻げてぬかづいた。西行の「なにごとのおはしますかは」といふ歌のまことが、そのときのわたくしの心であつた。いま、日本の古神道の精神を今の自身の詩の最高の境地に置くわたくしの精神は、更に徹した、更に確かな現實的な根據の上に眼を開いてゐるやうな氣がする。神々、神々の中の大御神、日神、おほ御祖先みおや、皇大神宮の大稜威の前にわたくし

は深くひれ伏した。

「神々の世の大御心を近代の言靈の上に天降したまへ。」古事記の更新と整齊とを一生の大願とする今のわたくしは、あまりのおほけなさに心悸しきりにをのゝいて、涙をのみ、両手にぬぐつた。

川原大祓かはらのおほはらひがその日の午後にも行はれた。「潔めきよ」こそ神道の真髓である。神の御前に潔めに潔める、掃ひに掃ふ。清淨無穢、心に一點の塵をだにすゑじとする朗かにして白く澄みわたるもの、日本民族のこの「潔めの心」こそは神を更に地上に繼ぐものでなくて何であらう。

この日、午後の四時、黒の禮装をしたわたくしはまた神橋の袂の青い梅檀の實をあはれがつた。その梅檀の青い實には雨と霧とがしきりに降りしぶいた。わたくしは左腕に紅の二線を染めた遷宮新聞通信團26東京日日と記した腕章を巻いてゐるのだ。東日と大毎の委囑を受けて來た俄仕立の記者ながら、遷宮奉拜の光榮に浴し得るこの好機會を得たのを幸福にも思ひ爽快にも感じた。さうして途中で自動車の上から求めた廉物の蛇目傘を差しかけながら、

わたくしは大毎の記者達と神苑の砂道を急いだ。その掃き清められた砂の濕り、あざやかな、摘みそろへられた芝生の小松、玉露をとめた低い枳殻の垣、幽邃な樹林、清淨にして廣大なその神苑の雨の眺めは、やゝ黄ばみかけた櫻の木立をより幽かに暮れ残した。近きは濃く、奥の峰は濛々とうち煙つた神路山、五十鈴の川の瀬の音までがきこえさうであつた。私は歩き歩き、あの芭蕉の句を思つた。

何の木の花とも知れずにほひかな

板屋に白づくめの布の壁の棟にわたくしたちははひつた。その新聞記者の控所から裏參道をのぼる途中で、わたくしは思はず立ち停つた。驚いたのである。

雨にぬれ、蕙の上に坐り、或は洋傘をさし、風呂敷をかぶり、或はぬれみづくに肩をすり寄せてかがんだ一般拜觀の群衆の中に、その最も前の蕙の上に、鼠のインバネスを著け、傘も無くして端坐したわたくしの父がゐたのである。白い長い髯、視力の薄い、何かもの寒げな父。敬神家の父。

わたくしはまた見直した。その老人は父ではなかつた。こゝに父の姿を見るといふ、それは有りうべからざることであつた。然しながら有りうべきことでもあるやうにも思へた。父を思ふ痛みがひしひしとわたくしの胸を撲つた。

新殿の石階の下から雨儀の御廊下へかかり、参道の奥の奥の、特別拜觀席の第一の好い位置に、わたくしたちの座席は與へられた。それからわたくしと同行のN記者とは前に述べた千古の老杉の幾擁へもある幹を小楯に、その根方に足を拱み合せたのである。

三

雨はしきりにふりそゞいだ。

午後の五時、荒蕪を持つてのぼる雑色に赤の下衣の素足の二三が目だつた。何か歩役の兵士がぞろぞろと前を行つて蕃塀の後ろに消えた。斜め右向うの檜造りの新しい常夜燈に、いつかしら、新鮮な黄の燈がはひると、急に、あちこちの濡れた洋傘の反射が華やいで來た。紅の軍帽にカーキ服の儀仗兵が來た。彼等は石階の兩側に二列づつ竝んで、對ひ合つた。

著け劍をした。邪宗門僧のやうな朱羅紗の長い外套を著た無帽の老人が蕃塀の後ろの人立の中を掻き分け掻き分け出て來た。拜觀者とも見えず、無論奉仕の役の人とも見えなかつた。

この奇妙な徘徊者が現れた頃には、私話し雑話する人々の數が際だつて來た。可なり不行儀はかへつて知識階級に多い。洋傘と番傘の雫が珊々としぶき合つた。外套の襟の褐色の深い毛の間から、洋人の女記者が隣の雫を強い鼻をして振り返つた。帽子に赤いものが咲き明つてゐた。立ちづくめに蛇の目をシルクハットの男と最合傘をしてゐるのだ。

だが、上手の林の葉がくれを、ちらちらと縫つて下る消防夫の朱線の刺子が見えた。

五時廿七分、その林の中にパツと高張が點つた。一、二、三、四。その高張には大一の字が見えた。「造神宮のしるしです。」とN君がさゞやいた。

この高張の灯で、東側の儀仗兵の首筋と肩とがほのかに明つて來た。

と、雑色たちが、御廊下の菊の御紋章のついた高張に蠟燭をとぼしてあるいた。兩側の儀仗兵の後ろ頭にもほのぼのと光が纏つて來た。

青い袍と白、その四五人が參進する。松明を赤々と耀しながらまた出仕が來る。

「来た。」と、一同がざはめいた。と、松明がまた杉の木越しに明つて来た。

内閣總理大臣が參進して来たのだ。衣冠束帯、黒袍の彼濱口首相は、さながら赤銅の唐獅子のごとく威風堂々として、わたくしたちの前を通つた。その衣冠はよく似合つた。まことに國家全體をこの一個に彼自身が凝念し緊縮したかのごとく見えた。いゝ意味に於て頼もしい力であつた。

續いて内相と三重縣知事とが登つて行つた。

さうしてまた、わたくしは觀た。白い鳥の毛の、または黒い鳥の毛の、山形帽の、金光燦爛たる大禮服の金モールと勳章とを。何か構へた長身の、また短軀の、薄葉鐵人形のやうな高位高官の足取を。また漆黒の、黒の、黒の、シルクハットの絹の織緯の光澤を。

ともすると滑稽にも見えるその行列は、先の儀仗兵の非藝術的なカーキ服とともに、あまりに古風の森嚴相に對照される。さうして指揮官の蠻聲があまりに高處から絶叫し過ぎる。

何といふ訓練の無い蠻聲であらう。ツエッペリン伯號歡迎夜宴の海相のあの聲と内容とは何であつたかと思ふと、わたくしは惘然とした。

思ふにまた、日本の洋式服制には傳統が無さ過ぎるのである。傳統が無い故に古風のゆかしさ美しさといふものが、泰西諸國のそれらに較べて保全されてゐない。儀仗兵の服裝にしても、かうした神前の御儀に奉仕するものとしては、あまりに殺伐に過ぎやう。衣冠し裝束し、鞆を負ひ、弓矢を手挟む古の武人の勇姿をこそとは願ふが、さほどならずも今少しく典雅に飾られてあつてよい。

落つるは杉の雫の音であるものを。

「あ、霨が。」と誰かが空を仰いだ。雨儀の御廊下の上、わたくしのつい直前、いはゆる三本杉は幹の一つから、三本の太い枝を分つて天を摩す。その間からかうかうと白い雲霧が立ちのぼつてゐる。雨がよいよ幽かになつた。はちくくくと庭燎が爆ぜる。

と、淺黄の素襖に白足袋烏帽子の小工、造神宮のその小工の一連が、ほのぼのとして續いて来た。その素朴さ、そのつゝましさ。彼等こそはわたくしの眼の前にまさしく國の姿を爽

やかにした。彼等は参ひのぼる、参ひのぼるのである。

それからも、つぎつぎと行列について松明が来た。蕃堀の前には、絶えずかの庭燎の炎が爆ぜた。濃く濃く、煙の香ひが流れた。漂ふた。行列の合ひ間合ひ間にはまた、白衣の出仕が、葉のついた松の小枝で、砂上の火の粉をはたきはたき歩いて行つた。

いよいよ、まことのかうがうしい繪巻物の色彩となつた。

あゝ、松明、衣冠束帯。一人一人に颯々として、また二人二人に切々として、引き続き引き續き参ひのぼる。

息をのんだ、わたくしは。

祭世の宮は、勅使は、大宮司は、少宮司は、禰宜は、權禰宜は、宮掌は。わたくしはただ、衣冠束帯の、木綿鬘の、明衣の、八つ藤袴の、白い、黒い袍の、赤の、ひときは赤い袍の、緑の袍の、松明の火光に現れて、肅々と、さうさうと、わたくしの眼前十尺の御廊下の砂道を参進する、現實の、またはあまりに夢幻的な古風の色と影とに魅惑されて了つた。何れが何れとも分別する心の暇もわたくしには無かつた。

時は経つた。老杉の雫が、梢の梢から音を立てて落ちた。

それからの遷御であつた。

四

道敷の白布が敷かれる前、新殿に参進する先行の影がしゆうしゆうと下つて行つた。と、また衣冠に木綿襦、緑袍の宮掌。宮掌補の夥しい敷が道敷を隔てて、わたくしたちと對ひ合に列立した。さうして黒い警官隊が、灯を消した提燈をさげて、わたくしたちの前に一齊に立ち竝んだ。

内院のあたりでは、庭燎がまた一しきり火の粉を散らし初めた。簞箒の音色がした。

「捧げ銃」

儀仗兵指揮官の號令が、簞箒の縹渺たる神韻を破つて、また四邊の杉の雫を驚かした。が、然し、煙に咽せる咳の音も騒めきも一時にはたりと止んで、おのづからに幽玄の氣が四邊に満ちわたつた。

神儀は二十年鎮座の本殿をいよいよ出御遊ばされるのである。

庭燎はことごとく消された。ただ、所々に高張が僅に明つて、そよとも灯は瞬かぬ。

前陣の宮掌が二人、秉燭が四人、黝朱色に見える二枚の御楯をやや斜めに捧げて六人、朱紅に金の御銚を低めに二竿の四人、蒲御鞆二腰を二人、梓御弓二張を二人、薄黄の菅御翳二枚を四人、二枚の羅紫御翳をまた低めに六人、續いて金銅造御太刀二腰二人、玉纏御太刀一腰一人、須加利御太刀一腰一人、赤い袋もほのぼのとして。

あ、和琴の音がする。

紫綾御蓋は八人の宮掌補が奉持し、道樂の十二人の伶人は笙、和琴、篳篥の調律も微かに、大雅にして緩い緩い神樂歌と共に消えんとしては續き、續きてはまた絶え、衣冠と、さだかならぬとりどりの色と影とはしづしづと行きつゝ停まり、停まつてはまた肅々と流れて練るのである。

警蹕、奉遷使。

柏手、柏手、柏手。

一齊の柏手——篳篥、あゝ、和琴のほろんほろん。

白の生絹の行障である。權禰宜二人が奉持しまつる、と、二十人の權禰宜、宮掌が兩側より前踊みに、おそるおそる奉持しまつる絹垣の、同じく白の生絹の、風無きに風と起り、聲無きに聲は光り、煌と揺れ、さうさうと波うち、さながら大御神の御魂と揺れ、波うちて、神氣森嚴たるその中にこそ神儀は、おはしますのである。

わたくしたちはひれ伏した。あまりに畏い事ではあるが、この犇々と胸に来る忝さは、光は、聲は、をのゝきは、親しみは、血縁のこの直接に觸れ来る和らぎは、あゝ、何であるか。あゝ、わたくしはまさしく日本民族の一人であることを、感ずる、感謝する。光榮とする。

「言靈のまにまに生き生きさしめたまへ。」

わたくしは肅として拜禮した。

わたくしはかゝる神聖無比なる古儀には世俗のいはゆる拜觀氣分を嚴として拒否してほし

いとほ思つた。いさゝか憤りをさへ感じてゐた。ただの祭騒ぎの金ピカ行列であつて冒しまつることの多々あることをさへ深憂に堪へなかつた。

併しながら、こゝに至つて、わたくしは何の言葉も消失して了つた。凡てが聲をひそめ、形を正し、清明澄心の神機に参した筈であつた。

音がした。神代さながらの杉の雫の音がした。

出仕が後から後から道敷の白布を巻いてゆく。

後陣には赤紫綾御蓋が一基、八人の手に捧げられた後から、衣冠正しく貴く祭主の官は歩を進め給ふのである。

菅御笠二枚八人、梓御弓二張一人、革御鞆二腰二人、御鉾二竿四人、御楯二枚六人、赤々とまた差しかざす御火四人、後陣二人。

行き過ぎること僅に、しかも千年の時を隔つるかの如き幽かな箏篋の律調、和琴のほろんほろん。

長くも綾に清しき白の絹垣の御後べを、朱の火光のあなたに拜みながら、わたくしはまた

柏手を鳴らした。

と見る、杉の木立を透き、石階を上へ、上へ、御はいよいよ、新殿の雲上へと遷り給ふのである。音がする。杉の雫の音がする太古の氣流が雲を呼ぶ。

あゝ、さうして伊勢灣に奉祝しつゝある艦隊より發する、かの近代科學の青いサーチライトの觸角が長く長く、神苑の上空を、古蒼な神杉を新鮮に照明する。銀河のやうにほのぼのとして長久なその弧線。

百司百官の行列は、肅々と雨儀の御廊下を續いてゐる。

——「東日・大毎」昭和四年十月三日—六日號——

あはれ熊祭

「ほうい。」

「あら、もうお出かけ、わたしもこれから参りますのよ。」

あれは何だと訊くと、アイヌの娘だといふ。激しい盛夏の外光である。それでも何か薄暗い茅屋の内部である。派手な大柄の浴衣の襟を合して、丁度斜向きにさらさらと伊達巻を締めかけてゐるところで、私たちがちらと覗き込んだのだ。

流石に白哲人種だけあつて、眉の毛は深い立派な顔だちである。だが、まるで造りはそこらの安藝者だ。「みんなあゝかい君。」と訊くと「えゝ、このせつのメノコはなか〜ですよ。」と案内役のO君が、先きに立つた。

處は旭川郊外の近文ちかぶみである。見るかぎりの唐黍もちこしの青嵐だ。その緑と紅との北海道風景の

中に、とてもうち開けた隠元豆の畠がある。季ときは隠元の花盛り、白い、白い、白い。それに除蟲菊、除蟲菊。

道端の露草、ブシの花。

其處へまた、ぞろ〜わや〜と三百人の觀光團が通りかゝる。

「熊祭だよ、熊祭だよ。」

「ほうい、ほうい。」

著くと、鐵道省の膽入りは、既に、とある廣場に、日の丸の國旗を高く高く掲げ、正面に祭壇、その兩側に長い觀覽席を急造した。

何れも白い日覆の布屋根である。

「おや、熊はどうした。」

「なアに、これから引つ張り出すのさ。」

なるほど、中央には棒杭がある。

ところで、「買はないか〜。」である。

繪葉書、飯杓子、衣紋掛、アイヌ人形、マキリ、白樺細工。——並べた、並べた。ズラリと敷いた藁の上にゴチャ〜と飾り立て、坐つてゐる。もじや〜髪で、唇から頬にかけて半月形の刺青をした、——いや殆どがそれらしく何かで塗りこくつてゐるのだ——厚司姿の婆どもだ。それに飛白の、又は浴衣の草履ばきの、はだし跣足のアイヌの小學生だ。まるで縁日騒ぎの「旦那々々」「いらつしやい〜」である。

「諸君。」

とワイシャツが一步前に出た。同じ白の半ズボンに長いストッキングに赤靴、帽子は冠らず髪を綺麗に梳き分けたハイカラアイヌが片手をあげた。

「紳士及び淑女各位。」

おや〜と誰かが眼鏡を拭きにかゝつた。

「あゝ、今や將に、この滅びんとしつゝある吾がアイヌ民族の爲に、幸に御同情を蒙るの光

榮に接しましたことは、實に、えゝ、實に感謝に堪へぬ次第であります。何卒、今後ともよろしく御愛顧に預らんことを切望いたします。えゝ、茲に演出いたしますのは吾が民族の生命とする熊祭——」

さう云へば仔熊にやつと毛の生えたくらゐの奴がいつのまにか、まん中の棒杭に繋がれてゐる。

「猛獣ですぞ。」

と、矢庭にハイカラアイヌが飛び出して來た。仔熊と侮つた一人がカメラで近々と差し覗いたところを、ワアウと其奴が躍りかゝつたものだ。

「あの猛獣も殺られまつしよきに。」

そこへ、いよ〜ワイシャツをまくりあげ、奇術師よろしくの身振手付で、その酋長の婿がねといふ男が場の中央に出る、半弓に白羽の矢を手たばさんで、ヒョウと一つ、矢もうまく逸れるが、熊も心得てくるりと繩付のまゝで身をかはず。

「お芝居だよ。」

ギョロリと熊の神様が
お睨みになる。

「シヤモのけちんぼう、ほうい、お酒が無いよう。」

「何だ、焼酎かアい。」

「もつとお呉れよう。」

「旦那々々。」

「ちよと、いゝひとオ。」

何だ、ありや、えらい婆どもだなど見てみると、それがイナヲ（御幣のやうなもの）を立て、太刀箆や五器類、アイヌの寶物などを、飾りつけた祭壇の前、地面に一列に並んで坐つたところ、大婆、中婆、酋長の髯だけは、それでも堂々として威風邊を拂つてゐる。厚司著の刺青、繪葉書にある通り。

ソレ唄だとなると一列に手を拍つて、ピリリ／＼と舌の尖で鳴らす。ヤエサマといふ曲だ。なか／＼の美聲である。と、また輪になる。何かコーラス、それつきりで、コラサとなる。

「安來イ千軒エエンーン。」

キタサである。

おや／＼と呆れてゐると、今度は、追分、枯れすゝき。

「ストトン／＼と通はせて。」である。

「どうだい、うまいだらう。」

「なにイ、このスレカラン婆ア。」

「一寸、北原さん、お並びなさい、撮りますから。」

「馬鹿にするな、御免蒙るよ。おい。」

弱つた。アイヌの大婆といつしよにカメラに入れようとするのだ。

ところで悲鳴をあげたのは吉植庄亮である。

「ひやあ、俺の耳に噛みついたよ、ふ。」

酔つばらひの酋長の娘から、彼氏、へなりとかじりつかれて、驚いて両手を八方に振り廻

した。

何といふことだ、この白日青天の下で、いさゝかの振舞酒に激昂したアイヌの皮肉に逆襲されようとは。

「ほうい、鐵道省のけちんぼう。お酒が足りないようだ。」

焼酎五升では成程、商賣物の熊祭にはちと安過ぎた。

白いテントがパタ／＼と風に煽られると、ラオツ／＼と、飾り物の熊の神様がカムイお唸りになる。そこでまた、赤いお舌でてあし肢脚をお嘗めになる。

「ジョン・バチエラさんが泣きますよ。ジョン・バチエラさんが泣きますよ。」

註。ジョン・バチエラ氏はアイヌ學者、その救ひ主。

——「文學時代」昭和六年八月號——

湯 岡 子 の 墓

蟾蜍は琉球のワクビ、九州のワクド、幻術によく出てくる蝦蟇がまといふのがそれだ。圖體が大きくて鈍重でわつさりと地べたに匍ひつくばつてゐる。湯岡子の墓はあれとも少し違ふ。だが所謂殿さまがへるとも違ふ。もつと大きくてのろのろしてゐる。大きいのは蝦蟇ほどもある。エロでグロテスクで、うじやうじやして、ぎいぐう、ぎいぐうだ。凄まじいの何のつて無かつた。

南滿洲湯岡子温泉のお話である。

なにしろ、四月の九日か十日頃の事だから、春とは云つてもまだ其處らの池には氷がきつしり張りつめて、寧ろ青く青く冴えかへり、きびしく白く凝りこもきつたやつは、ざらざらに表

面から毛ばだつて、目にも痛いほど吹きさらされてゐたのだ。

驛の廣場にはピストルを腰にさげて、附け剣をした立て銃の構への日本の守備兵がゐたし、朝の寒気に、赤い山楂子の串を賣りに來る支那人の影も、日向から日向へとあるいてゐた。

この湯崗子の温泉といふのは、熊岳城・五龍背と共に滿洲三温泉の一つで、唐の太宗が高句麗遠征の際に軍兵を此處で療養さしたといふ傳説がある。清の乾隆帝も駐つたと云ふ。日清戦争の終期には鳳凰城から牛莊へ進軍の途中に我が兵士の征塵を洗つたところであり、日露戦役にはクロバトキン大將が露軍の療養地にする爲に大規模の温泉場を設けた所である。

驛から眞直に幅廣い一本の道が通じてゐて、兩側の何といふ枯れ枯れの楊柳の並木であつたらう。夏ならば柳絮が白く飛んで、銀緑の光線がそこらいつばいに涼しい涼しい微風から吹きあふられるであらうところのその楊柳のトンネルも、その頃はまださむざむとして、私たちの靴音までが凝りきつた土にかん／＼響いて行つた。

その向うに赤煉瓦の、何々廳とでも云ひさうな巍々たるホテルが見えた。それが對翠閣と

いふのである。その外にも玉泉館、池を隔てゝは支那風の清林館といふのがあつた。とにかく、湯崗子の温泉は非常にエロで、それにボツて危険だと佐藤惣之助君が出發前に私に注意してくれたので、日程表には家人から赤○を附けられたのだつたが、案内の滿鐵の情報部のY君が、いや決して彼處あそこくらゐ上品な温泉はありません。それは何かの間違ひでせう。行つてご覧になればわかりますが、女中なども鞍山あたりの相當な家庭のお嬢さんたちで、みんな女學校あがりの淑やかなものですと辯解した。それならと、富田碎花君たちとやつて來て氣持がよいので、つい二泊して了つた。なるほど室附きの女中などもよく訓練されて、つまましい、行儀正しいサアヴィスぶりであつた。

三日目の朝、此處から先發した碎花君をそのプラットホームに見送つて、Y君と私とは歸り途のちやうどその並木道であつたのである。

少し散歩してみようと私たちは對翠閣の前から右にそれて、ほのぼのと湯の香のたちこめた小川の岸へ出た。と、ぎい／＼、ぎい／＼である。

墓なのだ。それは驚くばかりの墓がへるであつた。二千匹もゐたであらう。すがれすがれた葦の根や、その折れ莖や、風にかさつく残り葉の、何ひとつ青いものも見ない水の面が、ただ、黒と緑と、薄黄との肉塊ばかりで埋もつてゐた。のろのろと、なまなまと、ぬめぬめと、もこもここと、これらの目も口も肢も腹もない、ザボンの實ほどの肉塊が浮んで、沈んで、とろめいて、時折りぎいぐう、ぎいぐうなのだ。流石に湯川だけあつて、此處ばかりは氷も張らず、水には湯が交つて、白々とその湯煙を、あちらこちらからにほはしてゐた。だが、身も竦むばかりの墓がへる風景はどうだ。

「驚いたね。」と私はしやがんでちつと眼を見すゑた。

「墓なんて、一體、水の中でかう集つてゐるものかね、驚いた。」

ところで、閑なもののだ。私たちは並んで蹲むと、そこらの枯葦をヒシ／＼折つびしよつたやつで、それらのなんともつかぬエロの肉塊を仔細に御検分となる。

何でも五匹か六匹かは一團となつてかぢりついてゐるらしい。そこにもこゝにもである。

どれが雄オスやら雌メスやら皆目わからないのはまだしも必死とかぢりついて背から腹から抱き合つ

て、上もなければ下もなく、頭もなければ尻もない、のつぺらぼうの肉塊の、まことに渾沌とした原始の夢幻状態であつた。

それが、葦の先などで一寸つゝいたところでびくともするものぢやない。ぶち擲いたところで、また、ひくりともしない。とろりとろりと眠つたまゝだ。

そこで、ええ畜生となる。Y君はぢりぢりして突き刺すまでに、その肉塊の中ほどに棒切れを當てゝ持ちあげる。無数の疣々なのだ。

血がタラリと出る。それでもいつかな離れようとしなさらぬ。離れようもしない奴を、こちらにもまた意固地につゝいて持ちあげる。ぬめりとして、重い重いにつて、やつと一匹引きわけたかと思ふと、そいつがまたひとつとんぼうつて、またかぢりつく。悠々たるものであつた。

それをまた、その肉塊の中へ、えいえいと棒切れを突き刺すと、やつと持ちあげて、パツと地べたへ放る。のんきなものだ、放られた墓がへるの奴、のそりのそりと四肢で匍ひつくばつて、また水の方へあるき出す。

御苦勞さまにも、一つの怪體けたいな肉塊を五つにも六つにも分解するまでには凡そ一時間もか
かつたらうか。さうした肉塊がそこらには全かうじやうじやして、時たまにまたぎぎいいくくううのだ。
ぎぎいいくくううのだ。

それから、凡そ二十日あまりも経つたであらう。私はY君と、遼陽、撫順、奉天、四平
街、外蒙の鄭家屯、公主嶺、長春、滿洲里から引き返して哈爾濱、長春から吉林、また南下
して鴨綠江北岸の安東、五龍背と南滿北滿のおほかたの鐵道沿線を歴遊して、再び、長途の
旅の疲れを湯崗子の温泉に癒やさうとした。もう五月も間近のことであつた。
著くと、例のお嬢さん風の女中たちが多勢で飛び出して來た。

「あら、先生、お歸りなさいまし。」

「お歸りなさいまし。」はよかつたねと私は笑つた。さうして、まるで私は女學校の校長さ
ん扱ひだなとをかしくなつた。なんと若い美しい女學生たちだつたらう。

ところで、その晩になると、コラシヨイ、アラ、エツサツサだ。ホテルの大廣間では大變

なことが起つたのである。幻滅々々。太鼓が鳴る、三味が鳴る、我が女學生たちは厚化粧に
頬かぶりの、襷に、尻からげの紅い蹴出しもあらはに、腕にはそろつて箆をひつかゝへて、
一列に、アラ、エツサツサアである。安來：：せんげええん：：んん、とやるのが、ホテ
ルの支配人で、コラサイと太鼓の撥で拍子をとるのが高等理髮の親爺、三味線は女中頭のふ
とつちよのお春さんといふのだから驚いた。

客はと覗いて見ると、上座には疊に腹匍ひに長く寝そべつた頬杖の赭ら顔の毛唐が三四人、
ニヤ／＼鎌首をもたげた横手にはチョビ髭の關東廳の通辭や小役人が引添つて滿悅至極の體
たらくである。酒顛童子は大江山の巖屋といふところ。

鱈すくひがひとわたりお濟みになると、今度は入れ換りまして、新流行小唄の何とやらで
處は滿洲、湯崗子レビユーとなる。べらべらな緑のドレスに大根足、ラララララ、ララララ
ラ、テラ、テラタツタである。國辱だ。

訊くと、彼女らは速成仕込で、既に二十幾らかの踊やダンスをあげたといふ。

淺薄低劣、見るに堪へずといふところ、一體、誰々があの中にあるのだ、何としらじらし

いお嬢連だと怒つても、あらいやだ、ふふふでみんな逃げ出してさふ。馬鹿にしてゐる。

その翌朝、私は室附の女中と二人で、わづかに薄氷の汀にしやり／＼してゐる池の端を、日あたりのいゝ娘々ニヤンクミコ廟ミヤの小丘の方へと漫步しつゝあつた。

風は寒いといつても流石に其處らの桃の枝にはほのあかい蕾がふくらみかけて、傾斜面の枯草の間にも何かしら青い芽ぶくものゝ匂ひが、廣漠たる滿洲の曠野にも春既に到れりと思はせるものがあつた。近くには鞍型の鞍山あたり、日の光が柔かに當つて、眼下には幾何學的な赤い道路の幾線かに、薄黄ばんで來た楊柳の梢や枝々の影が射映して、五色の紙牌を吊した飯莊イハツツや悠々たる日向ぼつこの土民の姿などが目に動いた。

娘々ニヤンクミコ廟ミヤの朱い扉を押して這入ると、やはり草枯の庭で、覗くと、剥げちよろけの艶冶な娘々の立像などがその廟のほの暗い、閑しづかな内部に押し並んでゐた。

また外へ出て、日のあたる丘の傾斜に私は坐つた。若い彼女は大きな木鋏を持つて、二枝三枝、蕾の桃を伐り取つて來たが、私の傍に並んで枯草の上に蹲ると、一寸しなをした。

「ね、先生、わたし先生の昔のロマンス知つてゐますわ。」

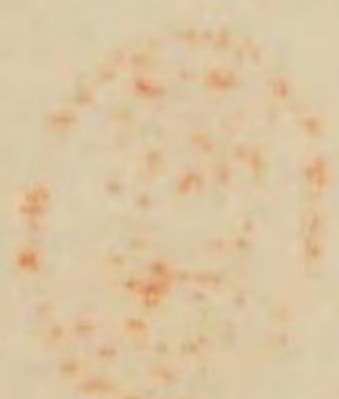
何といふことだ。私は苦笑した。

「さあ、戻らう、おなかが空いたよ。」

その晩がまた大變なのだ。裏の玉泉館に活動があるといふので、お嬢たちから誘はれてその二階の廣間へ附いてゆくと、怪しげな緑の微光の中にあるわらわ男女老若うじやうじやなのだ。映畫は此處でも相變らずのチャンバラ劇、驚いたのは、人中をも憚らず、長々と俯向きに身體を伸ばした男の背中に、逆に跨いで乗つかつて、ぼん／＼としきりにそのお尻をひつばたいてゐる瘦せこけた支那服のゐたことだ。何だと訊くと、按摩だといふ。恐れ入つて、さつさと私は歸つて來て了つた。

湯川の墓、湯川の墓。

書くことを忘れたが、その日の午後、曾て此處から先發した碎花は、滿洲各線のほとんど



を踏破し盡して一旦安東まで下ると、朝鮮經由で後を追つて來たその夫人を迎へて、また哈爾賓までの逆コースをとり、見物が畢ると仲むつまじくまたこの湯岡子まで歸つて來たのである。

私とYとは驛まで出迎ひに行く途中、少々の餘裕をえて、久しぶりに湯川の墓の群落を訪問してみた。

まことにその湯川は春まささに到れりであつた。いつかはいぢめぬいた墓がへるの肉塊も、もう團い團い渾沌状態に溶けあひかぢりあつてもゐなかつた。一匹、二匹、三匹、ほどよく分離して、或は重なりあつて、眼や口や跂足や臀部や、はつきりとした墓がへる本來の形に還つて、のそのそと、とろとろと、浮いたり、沈んだり、泳いだり、水中にとんぼうつたり、くうくう、ぎいぎいであつた。

ちろちろと、また、黒々と、岸へ岸へと群れて、動いて、尾を振つてゐるおたまじやくしの夥たましい数は凄まじいの何の、水から水へ見極めもつきさうになかつた。なにしろ二千匹からの墓がへるから生れたおたまじやくしなのだ。

やゝ角ぐみそめた緑にまつはる湯の香がまた、白く白く、生ぬるく、惱ましい限りであつた。

くく、ぎいぎい、くうくう。

私はその夜、活動から歸ると、獨りで、長い長い廊下を傳つて、階下の浴室へいそいだ。さうしてその夜更に限つて、奥の小さな特別室にこつそりと這入つてみた。鴛鴦せしどりの湯といふのである。

ちやうど、あの墓がへるのやうに、とぶんと薄緑いろのタイルの湯壺に飛込むと、ゆつくらと手足を伸ばしてみた。一寸俯向けに泳ぐ形をしたり、タオルを頭からかぶつてみたり、ばしやくくと湯の表面を掌で叩いたりしてみた。さうして碎花夫婦へ贈る三十一文字などを考へたり、獨りで苦笑したりした。寂しくないこともなかつた。

湯岡子遠く來りてあはれあはれをしどりの湯にひとりひたれり

春の枯野

春の枯野。

まさしく季節は春に向つて動いてゐた。それにしても枯野は枯野にちがひなかつた。何ひとつ青いものを観ない滿洲の三月ではあつたが、既にそこらには冬とも思へぬ土の暖みがあつた。日のあたりであつた。私の謂ふところの春の枯野であつた。

38

鶉よ。

私は黒と白との鶉の羽を借りよう。さうして南滿鐵道線路に沿つて北へ北へと飛翔して見よう。

滿洲では午後の一時は十三時と呼ぶ。いかにも春の枯野の時間らしい。そこで私の鶉は十三時半から飛ぶ。晝飯の紹興酒がいさゝか長閑過ぎたのだ。さう云へば、金州紳商茶館の楯

間には晝棟齋雲といふ大額が懸つてゐた。

楡の群落がある。寒々とした細い枯枝の髪である。黒い髪の中に鶉の巢がある。その巢が更に露はに凝えて見える。

禪林有慶天然樂、僧舍無塵自在春。さうした木彫の双聯を、日あたりの寺門に眺めて、その次は昆蟲母作といふ字にぶつかふ。何の事かしらと思ふ。閑かな岱宗寺の廣庭である。光と影とがくつきりとしてゐる。木は松と柏、人ひとり塵ひとつ見えないその寺の、何處からとなくきこえて來る咽ぶやうな胡弓の樂である。

39

天齊廟がある。私は覗いて見る。東尊三界と云ひ、寒林靈所とはかうした廟のことかと思ふ。孤魂白脫化、滯魄晝起昇。すなはち地獄極樂のもろもろの體相が一堂に集められてゐるのだ。

乾漆であらうか、張りぼてであらうか。舌を抜かれる者、横臥して首を鋸引される裸婦、火の車、或は秤の上、劔の山に追ひ上げられて泣く者、脅え狂ひ、戦き、恐れ、掌を合はす

者、その人形の彩色の白はあくまでも白く、黒はあくまでも黒く、赤はあくまでも赤いのである。

だが、こゝで私は微笑する。何とうれしい鬼と人間どもだ。覗いて私は微笑する。何と穏かなよい顔をしてゐることぞ。殺す者も殺される者も、どれもがどれもが和やかなのだ。うつらうつらとしてゐる。まるで酒か阿片にでも陶然と酔ひひたつてゐるやうにも見える。こんな地獄なら墮ちても楽しいであらう。と思ふと心臓がこそばゆい。流星に支那人は悠容おつせりとしてゐる。

ところが、また、何と緊張した極楽人形であらうぞ。張り満ちた固定した、にべもない、寂びきつた、さうした天人たちの顔つきの、何と人間らしくないこちこちの法樂であらう。こんな極楽なら有り難くもなからう。

春ともつかず、冬ともつかず、胡弓の咽びはまだ續いてゐる。

風邪は臍から引くさうである。私はぼかんとした紅梨カアンリをかぢつてゐる。熊嶽城いふかくじやうの外の砂湯

にもぐりながらぼかんとしてゐる。腹を仰向けに温かい砂をかけかけ眺めてゐる。あの襟巻は何處に忘れて来たらうと思つてゐる。裸の支那の子供の群が騒ぐこと騒ぐこと。しかもまた青磁色の空を流れる冷い大氣である。

鵲が飛ぶ。鵲の下羽根は凄いやうに白い。その鵲が三羽四羽と羽ばたいて楊柳やうりうの寒い林にかゝる。既に上枝ほづえにとりついて黒い尾を動かしてゐるのもある。楊柳の枯枝は細くてほうほうとしてゐる。こゝらの鵲の巢はひとしほに寒い。

枯野をまた四輪馬車が走る。幌馬車マアチヤが来る。軽い春の砂塵があがる。

ホテルでは白い湯けぶりが靡く。謡のこゑがする。三味線の音締めが洩れる。

喇嘛塔の立つ望小山ぼうせうざん、その枯色の土耳其帽。

私は観た、楊柳の寒い髪の毛を。到るところの日向に観た。

その枝の、梢の、あまりにも繊細な、長い髪の毛は、やはり穂の長い面相筆めんさうでしかも毛描けあがきのやうな細心さで描くべきであらうか。水墨の氣品をにじみ流してゐる。それはちやうど

梳櫛の齒で梳き流す寒さで細る。

百穂、恒友、さうした畫伯の筆を私は思つた。少くとも東洋の畫家はこの閑寂と墨色とを寫生し畫すべきである。

しかもまた、春はその根に深く宿つて、黄土のいろも何となく柔らんで來てゐる。

高粱穀でめぐらした土屋根、銃眼を覗かせた石壁の家、老爺の日向ぼつこしてゐる、或は畑に出て長い煙管を啣えてゐる、遊ぶ唐子の黄色い服、黒い犬と白い犬。

遠い残雪の山、

またしても冬木の梢、鵲の巢、鵲の巢。

滿洲の野は曠い。ぼうばくとしてゐる。

時として、丘陵の裂け目や斜面が赭く、或は黄褐色の強い色調を見せる。秃山の岩石も粗い。然しながら遼東を北へ進むに従つて、地平は遠く遠く遙かになる。縞目正しい高粱の白い根株の列が果も無く見る眼に續く、深く濕つて黒ずんだ黄土の原に、それらが雪のやうに光り輝くかと思ふと、陽の加減で弱く弱く晝つてゆく。さうした高粱の曠い枯野は陽の射す方から眺めると一帯が冴えて光るが、陽の射す方を見渡すときには、それは赤い夕日に向つても、ただに黒く黒く見えるであらう。何と荒涼とした逆光線。

ことにその變色の際だつものに畝に續いた土糞がある。鹽田のアンペラで包んだ鹽の小積みがある。

そのところどころにひよろ／＼の松の一二本がある。松のあるところには必ずまた土饅頭の墓がぼさぼさと残つてゐる。野道の枯木の下にも見える小さな石廟。

乏しい家々の聚落と、畑の色より色の薄い寒いでろ楊の疎林、借地の手も入れぬ枯草、黄と黒との矢羽根型の哩標、電線と碍子。

さうかと思ふと、沿線を黙々と續いてゆく避難民の群がある。白い動かぬ塊りの雲がぼかりと地平に浮ぶ。

畑に出てゐる農人の服地がきはめて濃藍色に明るいのもかういふ時である。

日の光と熱とはもう暖かなのだ。だからさうした稀々な農人のほとんどは糞叉子や木叉子

に頼杖ついでる。木の根つこ木の根つこでほろんとしてゐるものもあらうか。

驢馬と騾と、何か青い物を積んだ耕作ぐるま。ともすると、青馬が三、白馬が一、人が三人、その後からまた、赤馬が一、白馬が一、人が一人乗つて野を斜めに走つても行く。

春はすぐその後から追ひかけて来つゝあるのだ。

明るい鞍型をした枯いろの鞍山、近景のなだらかな枯草の丘、やゝ何かしらふくらみそめた低い木の桃、それに娘々廟ニヤンクミョウの朱い扉。色彩の房々した紙牌シハを吊した土民の飯莊と日向に並べた煙草の函、それにもまして春の來たのを思はせるのは、その湯崗子温泉の兩側並木のさむざむとした楊柳の間を、未だにわびしい陽の目を拾ひ拾ひ歩いて來る山査子賣の姿であらう。黒い帽子の赤いつまみと、藁づとに刺した朱紅色の山査子の串とは至極幼なびてうれしいものだ。たとひ池の面の氷の厚く白くきびしくとも、湯川の枯葦の根もとからは白い湯氣も立つ。何千匹とも數知れぬ墓のとりめきもまた、あまりに生あたゝかく物惱ましい。きいくうと啼く、くうきいと啼きつゞける。

薄日のわびしさ。私はまづ遼陽について語らう。

近づき近づきつゝある汽車の窓から、私は初めてあの白塔を遙かの寒い梢の上に見た。その白塔にはまさしく冬の薄日があたつてゐた。辿りついて地上の雪から高々とふり仰いだ空にも、何かしら雲が曇つて冷々とした大氣であつた。

いかに雪解の後とは云ひながら、城内の泥濘の甚しいことは、まるで泥川そのまゝであつた。騾と馬とが曳いてゆく車の上の焼鍋チヤンチヤウの籠の層の後から、私達の乗つた馬車は行つたが、その泥濘は既に踏臺の上にまで及び、踏み入り踏み入りする二頭の馬の膝頭の上にまで渦を卷いた。黄土の土塀や、將墻や、瓦葺の寺門や、さうした間を馬車は喘ぎ喘ぎ進むのである。さうした兩側の僅かばかりの乾いた通路を支那の童子共が寧ろ身を横ざまに歩いて來る。その土塀の角々や、さびさびした奥の通りの折れ目にはきつとまた枯がれの楊柳の二三本が閑寂そのものゝ畫趣に細つてゐた。市街とは云ひながらまた、其處には枯野そのまゝの水墨の風雅があつた。

さうしてその築地風の土塀の空には何か春めかしい霞がかゝり、それでもいくらか寒い霞の中に、薄明るい橙ほどの圓い太陽がぼんやりと懸つてゐた。私のいつも謂ふところの日の在處であつた。

さうしてまた、道の端の小さな喇嘛塔の前には、小さな黒豚の仔が遊んでゐた。

金銀庫といふ観音寺の臺に登ると、また、遠い枯木の霞にあの白塔が明つて見えた。東の方に残雪の山がやゝ青く冴え、近くには寒鴉、それは疎林、やどりき、冬はまだありありと遼陽のものであつた。

その丘はちやうどよい瞰下し臺になつてゐるので、私の眼に展ける城内の風俗繪卷は次々とうれしいものばかりであつた。わびしくも見えながら必ずしも貧しいものでもなかつた。閑かで穩かであつた。土塀と將牆と、いかに嚴めしく繞らした家々でも、上から観ればその内庭や、明り障子や、裏の井筒が隣り隣りに分明であつた。淺葱服の女や赤い子供もあちこちしてゐるし、ちよろ／＼と豚小屋から走り出る黒いものも見えた。

ある空地ではまた、長い柄の大鋸を向ひあひに緩るく緩るく動かしてゐる木挽の姿も見えた。何と云つても楊柳の枯木ほど、かうした薄日の情景にふさはしいものはないであらう。日が暮れかゝると、さうした楊柳の髪の毛は薄い紫色に靡くのである。

奉天の北陵や東陵に行つて、私は初めて古蒼な松の木立を見た。青や黄の瓦の牌樓や石馬、残雪、これらは御陵の枯れた槐や巨きな土饅頭の枯草の寂びれ以外には、いさゝか荒涼たる枯野の趣とも離れて、寧ろ傳統的な幽邃の境地に入る。それに就いては別に筆を改めることにして、私は更に北へ西へと進むであらう。

茫漠たる滿蒙の平原。

黄土、縞目正しい高粱の根つ株、土糞、さむざむとした榆と楊柳、でろの林立、あゝ、さうして鵲。

何處まで行つても同じ曠野の影と日向である。

まれまれに黒い馬の二三が、さうした日のあたりに出てゐるかと思ふと、野焼のあとに白馬が佇んで、折ふしは結氷した薄青い水の澤に若木のほの紅い楊柳の群落を影を落す。

土塙の人家、乾草、高粱垣。煙霞の奥の喇嘛塔。

空は澄みに澄んで、一片の雲も無い快晴にも、目も遙かの地平には流石に沙漠の沙塵が鈍く濁つて、所謂霏るものゝ緒みを激ます。

四洮鐵道は四平城、八面城、傳家屯、さうして鄭家屯に至つて、いよいよ東蒙古の大沙漠の入口にかゝるのである。

かうした枯野の涯から涯へと、白く輝く一筋の川の氷である。水邊は稍ほの青く溶けそめても、それは寂しさ過ぎる光の白だ。

それにしても、穩かなスロープに落した枯木の影はどうであらう。一つ一つに同じく斜に細々とした影を流して、あゝ、その髪の毛の枝々は久しい光の梳目を作る。

とある部落の隣同志、鳥居型の素朴な門、家に映る家の影、鶏の聲。

赤、黒、白の馬が曳く農用馬車、沙塵、沙塵、何處にも同じに春が來さうである。

おゝ、空眼をつかつて駱駝が來る。駱駝の步調は漫々だ。ばかりばかりと砂地を來るが後から追つてく驢馬の駈けりは追つても追つても抄どらぬ快々の疾驅で、しかもその驢馬に跨る蒙古の男はまだ裏毛の耳帽子も深々とかぶつて來る。

さして高からぬオボ山の石塔の上に立てば、一望涯無き未開放地の枯野が沙丘と展けて、夥しい牛馬の群が眼界にただ幽かに小豆ほどの粒と散らばる、移動する。さうしてまた近きは大きく跳躍する。

遙かの部落の土屋根、地平の楊柳林、その寒林の上空に、日は金色に圓く懸つて、光は八方に放射し遍照する。さうして次第々々に赤く赤く耀いて來る。

蒙古犬、蒙古犬、蒙古犬が吠える。

(私はこの鄭家屯郊外の沙漠で、蒙古兵の爲に危く捕へられるところであつた。この記事は委しく別稿を起すつもりである。)

まさしく赤い夕日の満洲である。

私の鵲は四平街から郭家屯、公主嶺、長春、更に寛城子、米沙子、松花江と、北へ北へと飛ぶ。

豆粕の圃積とんづみの山、朱と灰色の給水塔、犬を連れた守備兵、雪の上を走る子供、煉瓦焼の家、銃眼のある壁とごろた石の壁、畑いつばいに出てゐる種子蒔の人、沿線を小鳥のごとく飛ぶ物の葉、野に匍つて低く白く灰色に斷續する汽車の煙、高粱畑なかみちの中道を何處までも大跨に歩いてゆく青と黒との人物、草積む馬車、未耕地のつむじ風、あゝさうして青磁色の遠空。

さてはまた何處も同じ枯れ枯れの榆と楊柳、でろ楊。

近景と云はず、遠景と云はず、かうした満洲の大平原に落つる夕日の赤、赤、赤である。

さうして北へ進むに従つて、いよいよ黒みを増す土の肌にしみじみとにじみ光る夕日の朱紅である。

寒い林から林へ、夕焼が飛ぶ。時には口髭のやうなちよつぱりした疎林にも燃えつく。その間から遠い灯がちらちらする。炊煙があがる。

けれどももう季節は春に向つてゐる。極めて和やかな夕日の照りに會ふことも無いではない。紅い霞の夕べもある。

さうした穏かな無風の時には、平らかに平らかに枯野にあかる夕光である。

たとへば、なだらかな丘、その丘の土饅頭や紫がかつた低い枯木の群落、或は窪みの雪だまりなどに、何とも云へず柔かにあたる紅みの色である。珍らしくも閑かな明りである。私はさうした有り難い眺めに幾度か出會つた。涙もこぼれ落ちぬべき忝なさはあゝした和やかさであらうか。

さうしていよいよ日が落ちて了つても、雲か山かと思ふ地平うらみの黝朱あさぎいろの空がいくらか残つて、近みの残雪や川の氷は青く冴えまさり、一帯の土の肌はなほしも黒く黒く落ちつて來る。

寒く、赤いばかりが満洲の夕日ではない。

滿蒙の枯野は何處まで行つても同じである。

私はもつともつと北へも行き、東にも廻つたが、時はちやうど四月に入つて、また元來た空を引きかへした。

すると、どうであらう。あの寒々とした楊柳も榆もでろ楊も、氣のせるか、何かしらその細々した枝の先々までが、張り満ちた力に匂ひ出して來たやうに感じられた。

白くきびしく閉ぢてゐた川の氷もいつかしら溶けて了つて、その水面にはかぎりない漣のちらちらがあつた。風が光とさざめいてゐた。

其處らの澤さわにも何か青みが角ぐんで、黒と白との鵲も低くすれすれに羽ばたき、しだれ柳の芽生がまたいちじるしくすすろいでゐた。

雁の渡るのも遠い丘の空に見えたが、近くの疎林をうまく乗りこなして來る騎馬も沙塵もいよいよ春のものらしく霞んで來た。

枯れはてた根つ株の高梁畑にそろつて打つ鉞の刃は、まるで漣の光の揺れとも見えたが、四頭六頭と連れて駈けてゆく馬車馬の歩調も、その膝頭から蹄まで、よく合つて、そろつて見えた。

その高梁畑の黄白の畝間を、あの黒い滿洲豚の群れて喜んで走ること走ること、それに小さな朱の廟。

飛んでもないところにまた白い鷺が浮いたり、人聲が笑つてゐたりした。

春の枯野が霞んでゐた。

カナリヤの胃袋

食卓には、次から次と、露西亞生粹の料理の皿が運ばれて來た。スープだの、カルパスだの日本の三ばい酢みたやうな小皿もの、それから、骨つきの鶏の焙り肉などである。

哈爾賓の何といふ街であつたか、その家庭の名も今は記憶に無い。私はただ竹馬の友Hの案内で、何といふこともなくその家へ連れられて行つたものだ。その一室を借りてゐるといふK嬢の招待らしかつた。彼女は商品陳列館に通つてゐてHの下に務めてゐた。

その家の前で、逞ましい黒い毛の犬が二匹、鎖を振りもぎさうにして私たちに躍りかゝつて來た。少なからず憎えたものだが、内からK嬢が出て來て言葉をかけてくれたので、いく

らか穩かになつて、それつきり戸口に蹲つた。春とは云つてもまだ冷々として、日のあたりも薄く、光が無かつた。

這入るとすぐに食堂なのだ。手狭な、極めて簡素な住居であつた。K嬢の借りてゐるといふ室の外には、たつた一室きりらしく、そのドアも上手かまてに開けつばなしにされて、其處にはまる見えのダブルベッドがまるで皮をはいだ子持鯨のやうに大きな圖體をむき出しにしてゐた。何と露助は朗らかで開放的だらうと驚かされたものだ。

夫人が下手の臺所から出て來た。四十五六の、もうよほどに老けた姿まじふりであつたが、その痩せ型の白い面おもてのどこかに貴族の出らしい争へぬ氣品が遺つてゐた。社交馴れのした愛想のいゝ態度で、かれこれと氣を配つて、さうしてよく眼で笑つた。

いきなり食卓テニブルに著かせられたので、どぎまぎしてゐると、臺所からは、これも露西亞系の婆が幾皿も幾皿も持ち出して來た。さして贅澤な料理でもなく、すべて手製のものらしかつたが、澁い酒のさかなになるのが多かつた。金目のかゝらぬわりには、心のこもつたものであつた。

婆やといふのは、何といつても口数の多い、日本のそのやうに卑しく見えないことはなかつた。矢張り露西亞の老婢もこんなものかと、私にはおもしろく眺められた。

ウオツカがリキユルグラスに注がれた。老夫人は立ち上ると、巧みな手つきで、その一つを眼よりも高く差し上げた。愉快なものだなど、私も立つて乾杯した。どうにも明るくて、のびやかなものであつた。

私は露西亞人が好きだ。樺太で逢つた農家のそれらも、質朴で、お人よしで、野呂間で好もしかつたが、品は違つても、この夫人の自由な潤達なところが、私を樂々と寛ろがしてくれた。

言葉が通じないので、私は啞のやうに微笑ばかりして、杯をあげたり、フオクを動かしたり、匙をすくつたりしてゐたが、愈々となると、

「ほう、これは珍らしいな。」

「や、これは通なものだ。」

「うむ、こりやうまい、何といふんだ、いつたい。」

「いゝ色だな、この紅いのは、君、訊いてくれたまへよ、何といふか。」

「え、有り難う、どうも、や、これは。」

とう／＼、日本語で、お辭儀なしに戴かうかとなつた。隣のHの方へ話しかけ話しかけた。そのうちに、主人公らしい堂々たる偉丈夫が歸つて來た。夫人よりも寧ろ若々しく見えるほど胸を張つて、頬鬚も深く、鼻下にも長い八字髭をピンと兩方に反らしてゐた。何でも帝政時代には陸軍中將の位階にあつたといふ人ださうだつたが、氣の毒なことには當時は落魄して、哈爾賓驛の切符きりをしてゐるといふ、その制帽と制服とが見すほらしかつた。

制帽を脱つて、壁の帽子掛に掛けると、改めて、一寸顔を紅くして、席へ著いた。

K嬢が、その方へ、上半身を寄せて、何か囁いた。その露西亞語は、私にわからなかつたが、ただ、プーシキンといふ言葉だけが耳にはひつた。何でも私のことを日本のプーシキンだと説明したとかであつた。

すると、その切符きりの老將軍は、急に嚴肅に姿勢を正して、私を觀る眼が恭々しくなつた。少くとも、私としては眼の遣り場も、フオクの持つてゆきやうもなくなつたが、そこは將

軍らしい大見識で、鷹揚に、さうして謙讓に、ウオツカの杯を私のために高くかざす、その人の貴族的儀禮はすばらしかつた。

かの本國では詩人はかくも高く評價され、敬愛されるのか、それにしても日本では。と、髪を綺麗に分けた紅顔の青年が、そこへ這入つて來た。その息子さんも何處へか務めてゐるらしく、薄給らしい身のまはりではあつたが、それでも嗜みのよいキッチンとした姿勢で、始終親父さんの傍に引き添つてゐた。ウオツカはいけぬらしく、寡黙で、ただ遠慮がちに何かをすくつてゐた。首筋や手の甲などもまだふわふわしてゐて、鼠の生れツ子のやうな紅みがあつた。

老夫人はその方へもいろ／＼と氣を配つて、時にはホウ／＼といふやうな無意味な聲を笑ひと共に投げかけてゐたものだ。

ところへ、七面鳥のやうに胸を突き出し、紫紺の帽には紅薔薇の造花を挿した、腰のまはりの思ひきり肥滿して、はちきれさうな、眼鏡の老婦人が、づか／＼と戸口から押し上つて來ると、食卓の私たちには眼もくれず、一氣に後をお通りになる。驚いて匙を置いた私は、

今度はまた、その傲風な老七面鳥が、例の主人夫妻の寢室のダブルベッドに仰向けにひつくりかへつて、さて、新聞をシヤに構へて読み出したのには少からず度膽を抜かれた。

どういふ關係のお婆さんかわからぬ。それにしても、食堂には招待された東方の來賓が今食事の眞最中なのだ。この野放圖で屈託の無い寛濶さはどうだ。平氣なものだと私は呆れて瞻るばかりであつた。

主人夫妻も、その不意の闖入者に對して、一向に氣にも留めぬらしく、振り向いて見もしなかつた。

老夫人は、盛んに、それからも嗜食をすゝめたが、私は滿腹して、もうどうにもならなくなつた。バンドをゆるめゆるめしてゐると、稍々茶目氣味に笑つて見せて、何か云つた。

Hを振り返ると「もつと食べる。」と云つてゐるのだと云ふ。そこで、私は左手を腹のところへ當てた。

もう滿腹ですといふ手附で、そして右手を振つて見せた。

すると、向うは、わざと眼を大きく睜つて、笑ひかけて來たが、その左手を乳房のところ

まで上げた。

私は、咽喉のどのところへ手の指を水平にした。

と、また笑つて、口の上へ持つていつた。

で、こちらは驚いて、鼻の頭までせり上げた。

眼の上へ、今度は向うが上げた。

たまらぬと思つて、私は、思ひきり、右の腕全體を頭のところへ上げて、笑ひ返した。

すると、どうだ。今度は頭の上の空間へ手の上るだけ両手を差し上げた。

そんなに食べられるものか、いくら御馳走だつて、死んで了ふと、辟易してゐると、

両手を拍つて、オツホツホ、ペウ、ピヨロ、ヘウヘウと小腰を曲げ、突き出した顔ぢゆう

を笑ひにする。

何の事かと、Hに訊くと、曰く、

「あなたの胃袋はカナリヤより小さいのね。」とさ。

これには一本參つた。

破れた手風琴

雪橇には三人までは乗れる。氷結した松花江スウホウカウをその雪橇で滑るのも、あと一週間は續くまといふ、解氷期に近い或日の午後のことであつた。渡つてゐると、ところ／＼には既に氷の青みがにじんで、いくらか氷面の薄手な個處も見えた。川つぶちは危険なので吃水線の下の朱の胴腹を傾げて反り氣味に凍えきつてゐる貨物船へ先づ辿りついて、その甲板からまたあゆび板をあるいて向う岸へ上ると、其處がすなはち太陽嶋といふ、ソンツエニイ・オストロフであつた。

その落魄した白系露西亞人の部落は、あちこちにそれらしい小住宅がゴタ／＼して見えた。時折りには牛乳を擁へた若い娘も出あるいてゐた。白系の窮乏は見た眼にも惨めであつたが凜然とした寒氣の中で、部落の赤や黄や青の色彩を、屋根だ、壁だ、窓枠だと眺めて、土手に立ち盡してゐる私も寂しい異郷人であつた。

何でも、其處の住民たちは、多くは女子供で、父親や夫はつき／＼に虐殺され、財産とて

無し、その日の居食ひに、片端から遣された家具調度の類をも賣り出して、どうにか露命を
繼いでゐるといふ風で、その家具調度とても殆どは手放したかたちであつた。食らへば山も
空しといふことがある。それでも眞夏の松花江は鮮麗で、爽やかで、あくまでも朗らかで、
楽しく自由だといふことであつた。水上にも端艇にも、川つぶちにも、家の裏にも、半裸體
の胸も股も手足も露はな男女のハレームで満ち、日光と水の飛沫と、明るい肉聲とで、そこ
らは燦爛とした畫趣に跳ね返るといふことであつた。さうした天真の流露性は貧窮の中にも
常に耀かしく笑つて寧ろ貪することをすら忘れて了ふ。いかにも露西亞人らしいと思へた。

雪後の泥濘を辿つてゆくと、色も無い枯野を後にして村の教會堂が、夕日に赤く染つて見
えた。鐘が傾き傾き鳴る、その揺れかへる鐘の幾つかの影までが、尖塔の窓からよく明つて
ランカンラン、ランであつた。よい時に私は雪橇を驅つて來たと思つた。

アンゼラスの鐘だ。

丁度、夕方の彌撒が終つたところで、御堂の内では、年老つた教父を取り巻く婦人たちに
よつて、改めて祝福される母と嬰兒の幾組かがあつた。父の無い、さうした哀れた嬰兒の頭
を、教父はその大きな菱びた掌で一々に觸つて行つた。

國際都市哈爾濱の中心、キタエスカヤの鋪裝路は、足、足、足であつた。あのポーズと、
あの足の美しさとは未だに忘れられない。何と白系露西亞人の女の、足のその連続のいき／＼
と明るく鮮かであつたことか。あの中には西伯利亞は通れないで、はる／＼と黒海邊から高
加索^{カサス}を迂回して歩いて來た足もあるとか聞いた。國は破れても白瑛瑯の素足があるといふの
か。

デパートの秋林^{オキリン}なぞの賣場にも、公爵令嬢とも姫宮とも言ひさうな高貴の貌^{かほ}だちの娘も
見えた。カフェにもバアにも、キャバレーにも、さうした氣品に富む女性の數はあつた。
それにしても、私娼にまで倫落しつくした麗質露西亞娘の、あの酒地肉林の妖艶と狂態と
を、私は幸か不幸か見聞する機會を持たなかつたが、その最も痛ましい階級に下つては、極
めて狭い一室に七、八を以て數へる寢臺の幾段かの鯨詰であるといふことを聴くに至つて、
私の頭はくらく／＼しさうになつた。

一方には美しい足の連禱、一方にはウオツカの地獄。
それでもハラシヨ、何でもハラシヨなのだ。

頭垢と虱のもぢや／＼髪に、襤褸の上衣、凍傷で下は切つて棄てた膝頭に藁沓をかぶせて
腋杖でいざつて、そして破れ帽子を裏向けに片手でつん出して、「右や左の旦那さまや奥さ
ま。どうぞや一文。」といふ。これが浅草や兩國あたりならまだしも、風俗もかけちがつた
哈爾濱の共同墓地ボルシヨウイ・プロステクトでお目にかゝらうとは、私も思はなかつた。

何であゝ躰や片手の松葉杖や、手んぼうの乞食が多いのかと訊けば、ウオツカのせゐだと
いふ。零下何十度の寒氣に、悉くが路上に酔ひ臥しての凍傷だといふ。それほどウオツカが
好きかと言へば、それは飲むほどに浴びるほどに、家も倉もいらなくなると言ふ。敗殘と流
離との末ならなほさらであらう。中にも外套だけは部厚なふか／＼した豪勢なものもゐた。
外套といへば命より二番目の大切なものらしかつた。手放せば凍えて死ぬより外はない。

それにしても、大連から滿洲里へかけて、中にもこの哈爾濱の市中でも、支那人の醉態と

いふものはついぞ往來で見かけたことの無いのにひきかへ、露助の酔つばらひのいかに多く
眼についたことか。國家の保護を信じ得ない支那人は極度に個人主義であつて、自分を守る
には自分より外は無く、文字の民として面子を重んずることも一倍であらう。内房では淫樂
と阿片とに溺没し陶醉する日夜はあつても、白日道途の上では些の油斷もある筈はない支那
族に對して、露助の何といふ開放的で無邪氣でルーズさであらう。民族性の相違はかうした
一端にも窺はれておもしろいが、私は露助を愛する。憎むに憎めないものが私をして心を熱
くさせるのだ。

何といふことか、而も晝のまつびるまに、その寒いのに、人の家の石段の上に酔ひつづれ
たり、柵の中にはひり込んで臥たふれてゐる白髪の老女の幾人をも、私は見た。

これには驚いて了つた。

キタエスカヤの早春の夜景は稀に見る麗しさであつた。店硝子からの灯影も、街燈も、澄
みとほつた中空の紫を掻き亂さぬほどの清明さをば、その舗装路に保つてゐた。

流石に陸續と流れゆく男女のスクラムも律度があり、秩序があり、北方の虔ましい深みのある香りと色とがあつた。

と、或る街路樹の蔭のベンチに、二三の人影が耳のついた防寒帽や、鍔の切れた山高、ぼろぼろの大黒帽の、俯向いたり、蹠たぶらけかゝつたり、松葉杖を後の凭たよれに寄せかけたりして、何れもガツクリとしたひもじさうな取り合はせであつた。

マンドリンを擁ようへた者、クラリオネットと共に手をついた者、大きな破れ手風琴を膝に眠りかけた者、様々であつた。

さうだ、晝間には同じベンチに、一丈ばかりのペンキ塗の刷毛を立てかけたり、鉋かまや鑿くわや手まはりの大工道具を風呂敷包みにして、呼びに来るお客を待ちくたびれもせず、とろんぼろんと腰をかけてゐる向もあつたが、さうして向うの街角には、何かむさくるしい支那服の女どもが、そこらいつばいに擴ひろげて、襤褸ぐつしたや鞆たぶらの糞くつしたぎ剥むぎをしてゐたものだつたが。

夜になると、かうした市井の乞食音楽家が、饑と寒さに身體をすり寄せて、そして物數奇の注意を牽ひかうと心待ちに影を落してゐる。

私は通りすがりに立ち停まつて、銀貨の幾つかを、その中の親方とも見える破れ手風琴の片手に渡した。

すると、哀れや、その老人は盲目であつた。さうして片かた跛ちんぱ足あしであつた。

驚いて、松葉杖を一方の小腕こでんに立ちあがると、急に直立不動の姿勢になつた。さうして一禮して、その左右に組の二人を立たすと、自分では、早速に、その破れ手風琴をその張りきつた胸の正面で鳴らしはじめた。マンドリンとクラリオネットが之に合奏する。

何と、その堂々たる奏樂ぶりであつたらう。

つい先ほどまでは、倫落の乞食そのまゝのよぼ／＼と見えた彼等が、いざとなると、盲めくらひた兩眼までが光るばかりに唼くはもうちをのゝき、片跛足もチャント立ち、耳無しも佝僂せむしも一齊いっせいに空を仰ぎ、脊骨を反らして、勢ひづき、勢ひづいて來るのであつた。

そればかりか、中にも破れ手風琴の、その市井の音楽家の、何といふ大見識に見えたことか。その嚴肅さは顔一面に緊しつて、火のやうに頬は熱した。あくまでも眞正面きつて手風琴を鳴らし、さうして朗々と聲唱した。恐らくは露西亞の聲樂の中でも有名な曲目であつたら

う。

彼の老樂人は、その手に弾き、聲に歌ふその瞬間には、全く紅顔の少年のごとく、又は不世出の偉大なる樂聖のごとく、己をその音樂の中に没頭するかに見えた。

おゝ、何といふその情熱であつたらう。

破れ手風琴は青龍の腹のごとく、ふくらみ、さうして、夜風を深く吸ひ、且つ弾け出すのであつた。

——二・五稿「若草」大正十年一月號——

滿洲隨感

赤い夕陽の滿洲は今や更生のあけぼのにある。驚くべき皇軍の偉力は、世界に唯一つの正義が、正しく今日の太陽であるべき事を示現しつゝある。銀翼と鐵甲と、あらゆる最新武器の意志と熱情とはまた、この祖國の生命戰に立つて、我が權益を蹂躪するあらゆる不信行爲に對し、斷固として根本的に膺懲しつゝ排撃しつゝある。全くかくあるべきであつたのである。

と、かう力みかへつて書かうといふこの隨感ではないが、どう考へてみても、かくあるべき日の來ることをわたくしも豫測してゐた一人であつた。

思ひつくまゝに筆を動かしてみよう。

もう二年前になるが、わたくしは、その昭和四年の四月に、滿鐵に招聘されて、ほとんど
駆け足的に、一ヶ月餘の日子を滿蒙の各地を旅行して廻つた。春とは名のみであつた。至る
ところに茫漠とした地平の果てと赤い夕陽とを見た。冬枯の楊柳と鶉、結氷した河川、砂塵
と幌馬車、銃眼のある煉瓦の土塙、高粱穀の垣と土の家、土糞と黒豚、寒い喇嘛塔、時をり
は朱と灰色の娘々廟、驛々の給水塔とトン積の豆かす、かう書いてゆけば蕭々としてはゐて
も何となく賑やかなやうでもあるが、實際は見とほしのつかぬ寒い曠野に、一つ／＼ぼつり
ぼつりと、小さく小さく、さうしてぼう／＼として、色も香もない天地であつた。

巨大な黒い機關車はガラン／＼とベルを鳴らして行く。滿鐵時間は正午を過ぎても十三
時、十四時と續いて行く。牛馬を乗せる貨車にも似た四等車といふのに、生色も無い山東の
移民がウジャ／＼と運ばれて行く。その僅な賃銀すらも持たない者は、ひどい服装をして、
汚れた薄い布團を巻いたのをたゞ一つ肩にかついで、沿線を北へ北へと歩いて行く。百里も
二百里も彼等は歩いて行くのだ。さうしてどこかに彼等の開墾地を見出すであらう。土と石

との籠のやうな家、壞粃と小耕犁、木叉子と糞叉子、やつと耕して蒔いて育てて、高粱がざ
わ／＼とみのるころには、馬賊が出る、兵匪が何もかもをさらつて行く。危うくすると大切
な命までを殘虐の手に委ねなければならぬ。とすると、彼等はいつたいどうなるのだ。それ
でもまたどうにか住みつくであらう。水も乏しい荒地で、黄塵にまみれて、たかが驢馬の食
糧程の食を常食にして、はる／＼とした地平へ向つて、朝から犁いて行つて、さて引きかへ
して來るころには日が暮れようといふほどの距離と時間と、根強い耐久力と、それほどの辛
苦とが、日本のどこの労働者に見出せるであらう。内地からの移民政策がはか／＼しく行か
ないのも理由の多數がある。人口過剰の解決について憂ふる前に、日本民族はその性情習慣
について、體力について十分に自己を超越せねばなるまい。

大連の華工(苦力)について考へてみても、彼等は埠頭に密集し、また嗜眠する。秃山の
曲馬團の外にまでも雲霞のごとく日光にひたる。白靈(滿洲雲雀)の籠を片手と肩に支へて、
その囀るまではのんびりと終日でも待たうといふのだ。長い銜へ煙管の悠長な大公である。
若しそれ有名な泥棒市場に行つて、盗品の充實を見、講釋師の前に群る臭い苦力の日常を見、

丸煮の豚の頭や、極めて廉價な蝶の揚物や、團扇のやうな饅頭を見、一本賣りの煙草を見た
としよう。飢餓のために命すら自ら殺さうとする人でも、この満洲にさへ來ればどうにでも
生きて行けることの自信を持ち得るであらう。暮らしやうによつては満洲極樂なのである。
思ひきり乗り出してみればいゝのである。

撫順のやうな大炭坑でも、臭汚に耐へ、勞銀の廉い支那勞働者の氾濫には、潔癖な日本人は
どうにもかなはないであらう。支那の移民は年々に殖えて、今は百萬に達する。この多數に
對して沿線の各地に散在する日本人はやつと廿萬の少數だといふ。その廿萬人すらが生活不
能者の家族をまで入れてのことであるから、實際に働いてゐるのは何程もゐないのである。
金を愛すること支那人に及ぶものはなさうだが、その根力と利殖道と個人主義とは、いよ
いよ益自己を膨大さしてゆく。ハルビンに行けばあの下駄の齒入屋までも巧智な支那人の手
に奪はれてしまつてゐる日本人である。日本人ほどその國家から個々の生命財産を保障され
てゐる安全な國民も無いであらうが、何等の依頼も持ち得ず、官邊の苛斂誅求や匪賊の略奪

に寧日も無い不安と恐怖の中で、しかも着々として自己を確立し福運をつかまうとする支那
人の進出はどうか。満洲をこれほどまでに開發したのも日本人なら、その權益を片ツ端から
犯され、その生活權をより狭められて、一々に蠶食されて行つたのも日本人であらう。

大連や奉天を見れば、いかにも豪勢な滿鐵王國であるが、その滿鐵と政黨との關係はどう
か。あらゆる事業が、滿鐵と、又緊密な姉妹會社との獨占である場合、その今日までの経過
は全民族の發展について、どれだけの光と力と希望とを與へて來たものか。僅に日本人は日
本人とだけの商利の友喰ひをして果して何の繁榮を來し得るものか。誰しもが沿線を歴
遊する者の考へ及ぶことであらう。内地人もまたあまりに祖國の生命線たる滿洲の重大さや
流血の歴史を忘れ過ぎてゐた。誰しもがいふ平凡なこの感想すら、タンクのごとく突進させ
ねばならぬ遺憾な状態にあつたのである。

全く日本人は輕侮され、近代支那は驕慢であり過ぎた。民人は商利に於てすでに壓倒的に
かさにかゝり、張學良官權の傍若無人と官兵の横暴、その他馬賊、苦力等の殘虐とは、一寸

通り過ぎただけでも憤慨せずには夜の紹興酒の一杯でも含めぬであらう。わたくしの甥の帝大生（工科）が見學のため昨六年の暑中休暇を利用して渡滿し、機關車に乗せてもらつてハルピンまで作業して行つたのであるが、歸京すると、「叔父さん、僕もすつかり軍國主義になりましたよ。」と奮然としたものだ。「さうだらう、さうなるよ。」とわたくしも肯づかねばならなかつた。

あの大連でも、埠頭の夜は日本婦人にとつて危険至極だといはれてゐる。大連はまだしもだが、いつたい、赤い夕陽が没してから租界以外へは一步も踏みだせないといふ不信な國家がどこにあるであらう。わたくしは長春でも、午前の九時頃に、まざ／＼とその公園で苦力に引つさらはれたといふ日本のある夫人の慘事を聞いた。一旦さらはれたらもうそれつきりなのである。白晝でも高粱の繁る夏秋のころは都會地の郊外一、二里の所にも、黒い恐ろしい脅迫と死とが、そのすごい三白眼でうかがつてゐよう。それにしても奉天北陵の前の張學良の邸宅の周圍には、鐵條網に高壓の電流をまで通じてあつたのだから驚くのである。何の

頼みにもならない。

その奉天北陵へ行く坦々たるすばらしい數里の直線道路にも電柱が中央に續き、數間ごとに又、方一間ばかりの穴が、世界地圖の國境の點線のやうにうがたれ、それが清朝第二代の皇帝たる太宗文皇帝の陵墓である北陵の正面までも間隔正しく點綴されてゐるのである。自動車の通行を妨害するためだといふのだから、また、驚いたのである。

東陵への歸途、わたくしの乗つてゐた自動車は、官兵らのトラックに眞正面から衝突されようとした。無理にも轟然と暗雲に向つて來るのである。慌て、避けようとするともまた、その方へ、こちらの胸腹めがけて乗りかけて來た。わたくしは危くそこで一命を失ふところであつた。日本人であるが故に。

四洮線の鄭家屯では、實にすさまじい蒙古犬の突貫と雄叫びであつた。晝間でも市中にさへ出られさうになかつた。それでもその地に一臺しかないといふ滿洲公所の自動車で、郊外



の未開地までドライブした。見渡すかぎりの砂漠であつた。その中にたゞ一つ低いオボ山(街西六支里に立つ七、八十尺の小山で山頂に達爾宰旗と博王旗との境界の標識を成すオボが數基並んでゐる)が蒙古人の頭陀袋のやうに立ち、十方に放射する金色の太陽の下から、一頭の駱駝が空眼をしい／＼ばかり／＼と驅けて來たところで、その後から早驅けの驢馬に乗つた防寒帽の蒙古人が長い鞭を振つて追ひ／＼して來る。遙に部落には楊柳の寒林が僅に群立し、その前には數千頭の牛馬が黒胡麻のやうに散らばつてゐた。それが面白さに思はず四五里は走らしたであらう。その部落に水がわき、砂は深くて自動車がめり込んで了つたところで、傲岸な酋長に二時間も怒號され、槍を立てた蒙古兵と土民に圍まれて、危うくまた大難に遭ふところであつた。うまく自動車が掘り出せて、一氣に圍みをついたから助かつたものの、まかりまちがへば中村大尉事件のやうな終末をつけねばならなかつたかも知からないのであつた。

滿鐵の汽車は安全だが、長春から東支鐵道の國際列車に乗込んでからの不快さは今にも忘

れられない。立派な寢臺のある車室でも一々出る時は鍵をかける。支那人の横着と盜癖とはドアの金具までも盗んで平氣であるから始末におへないのである。見てゐる前で盗んでゆく。だから、分時でも油斷はならないのである。食堂へ行くと、朝飯にパンとビール一本で十圓の紙幣を渡すとそのまま取つてしまつた。後で支那人のボーイが來てあれは會計のロースキーが不當所得をしたのだから取りかへして來るといつて取つて來たが、その釣り銭は自分もらつて行つてしまつた。時とすると、耳かくし帽にピストルの民國の警備兵が三四人もドヤ／＼とやつて來てにらみつける。何をと思ふのだ。

丁度東支鐵道の權益問題でロシアと民國との戰鬥の後だつたが、赫爾洪得驛附近の爆破の慘狀はすさまじかつた。廢墟の突きぬけの窓に赤い落日の光がさしこんで、砂丘には駱駝が立つて、残雪が半ば紫に光つてゐた。破れた風車の滿洲里もあはれであつた。そこらに人間の死骸がころがつてゐても、凜烈とした寒氣に遠くから來る駱駝のいな／＼きしかきこえては來ない。馬賊は櫛の齒で梳くやうにさらつてゆくといふが、潰亂した支那の兵匪は、梳櫛の

齒で梳くやうにきれいに一物も遺さず梳いてゆくといふ話であつた。指環を抜きとる暇も無いので、指環ぐるみ指の付根から切り落して行つたとのことも聞いた。領事館に逃れた僅な日本人の女達は、日章旗の有難さがしみじみとわかつたといふ。全く日本くらしの國はなく、日章旗の光輝ほど頼りになるものはないと思ふ。これは日本を離れて見なければわからないのだ。

奉安線の五龍背では沿線のつい半町ばかりのところ、うつかりノートを取りだしたので屯所の前で民國巡警兵に恐ろしい脅迫を感じさせられた。こゝでまた何をも思つたのである。

皇軍の馬賊掃蕩と兵匪排撃とは當然のことであり、堂々たる國威發揚と權益擁護である。むしろ滿蒙在住の民國人にとつては救世の天業であり、兵賊に對しては降魔の利劍である。かくして明日の滿蒙は實に共存共榮の平和な一大樂土となり、寶庫となり、人類のための福源となるべきことを疑はぬ。それにしても荒天と氷雪と酷寒とに處して、いかばかりの辛苦

を出征の將士たちが耐へつゝあられるか、感謝の辭がない。

私は詩を以て立つてゐるが、しかも日本の神ながらの、古神道を現在の詩の精神としてゐるものだけに、一層に日本民族の荒靈あらいまたまと和靈にぎみたまについて思ふことが深い。何といつてもわたくしは日本民族の一人である。思ふにAの民族とBの民族とは根本においてちがふ。どうにも理解されないものがあるのである。わたくしが日本の言靈の信奉者であることはわたくしの幸福である。わたくしは詩を以てこの祖國にいさゝかでも盡させていただくことをどんなに歡びとしてゐるか。軍歌でも何でも作らうと思ふのである。

わたくしはまた興奮してしまつた。

谷 中 の 秋

本 格

急にうすら寒くなつて來たやうである。かうして硝子戸越しに庭の眺めを寂しがつてゐると、何かひさしぶりに古風の歌でも作つて見たくなる。

妙なことに、わたくし達の年輩になると、誰もがより閑かな境涯と云ふものに落ちつかう、落ちつかうとする。この頃木下柰太郎君に會つたが、ひとつつけあひ附合をやらないかと言ふ。ぢやあやらうとなつたが、それでは明日木村莊八君のところで集らう。小杉未醒君にも速達を出して置くといふことで別れた。惜しいことにその話はそれつきりになつた。わたくしがその晩から胃を傷めてしまつたからである。

あの晩、

「文藝は時代の雑談だよ。」

と木下は言った。

「さうだね、ただ残るのは形の正しい詩だけさ。」

と長田は言った。

「餘は文學なりか。」

わたくしも微笑した。

それにつけても、今のわたくしの氣持では自由詩よりもキチンと格の定つた詩や歌や俳句の方により心を惹かれる。木下も、

「この頃、僕は俳句を作るよ。」

と笑つた。

詩壇の自由詩人たちの間でも却つて定型の俳句を道樂とすることが流行し出した。これはおもしろい。わたくしなども定型詩人の張本のやうに嗤はれがちだが、決して自由詩の存在

價値を否定しようとする頑固者流ではない。いや、自由詩人の一人でもある筈である。それがこの頃詩の定型に精魂をうち込むことが深くなつた。またよく觀てみると、事毎に新奇を弄する人たちの行き方も、たいがい自分たちの一度は遣つて來たのと筋道は違はない。で、新らしい俳句のあるものなども我々の自由詩の一行以上に出ないのが随分目にもつく。さうして、早晚あの行き方ではまた定型の十七字に還るのではないかとも思はれる。

それから、かうした傾向は詩歌の上のみでない。あれほど急進的な畫家だと思はれた人たちが、本來の日本人として、いつのまにか東洋の畫風を樂しむやうになつた。それだから藝道は微妙なものであると思ふ。老境にはひればはひるほど本格になる。然し初めから傳統のままの單なる繼承者で通したものには眞の生彩はある筈はない、變るだけは變り、殻を脱ぐだけは脱ぎ、何もかも思ふさまにやつて見た末に、全くの不自由形だと思はれさうな定型に眞のすばらしい自由があることを悟るであらう。

これはただに舊來の定型に還ることではないのだ。幾段も幾段もの上を大きく大きく螺旋形にまはつてゐるのだ。後へ後へ引き還したやうに見えながら、その實は先へ先へと進んで

るるのである。

書齋と星

「東京にはお星さんがないよ。」

と、うちの子はよく言ふ。

「あゝ、あゝ、俺には書齋がない。」

これはその父であるわたくし自身の嘆息である。

まつたく小田原の天神山はあらゆる星座の下に恵まれてゐた。山景風光ともにすぐれて明るかつたが、階上のバルコンや寢室から仰ぐ夜空の美しさも格別であつた。これが東京へ来てほとんど見失つて了つた。それでもまだこの谷中の墓地はいゝ。時とすると晴れわたつた満月の夜などに水々しい木星の瞬きも光る。だが、うちの庭からは菩提樹や椎の木立に遮られて、坊やの瞳には映らない。

それから、こゝの家である。庭は廣く、木も立ちこんで、廂の深い、それは古風な幽雅な

趣もあり、豊かな氣持もあるが、どの室にも日光が直接には當らない。濕けもする。全然開放的であつた小田原の家とはあまりにもちがひ過ぎる。あちらでは震災で半壊はしても、それは子供があるいても揺れてゐた階上の生活ではあつたが、極めて氣安く季節の風と光とを受け入れてゐた。さうしてまるで草木や昆蟲の世界に間借でもしてゐるやうに楽しまれた。書齋にしてからが居間にもなり、寢室にもなり、客間にもなり、食堂にもなり、子供の遊戯室でもあつたが、それにまた工場見たやうではあつたが、その雑然とした中にほんたうのいい統一があつた。來客は稀だし、物音はせず、常住讀書と思索と創作とに自分を遊ばせてゐられた。こゝへ來るとそれらのすべてが失はれた。

五月からこの方、わたくしはまだこの家にしつくりとは住みつかないのだ。どの室にも統一はあり、キチンとはしてゐるが、それだけ却つて壓迫されるやうな氣がする。どの室に机を据ゑても落ちつけないで、あつちへ坐つて見たり、こつちへ腰かけて見たりしてゐる。雑然と何もかも放りつばなしにして置く室が無いのである。寂びがあつていゝ家だとは思ふが、それだけまたうつかりとできないのである。

それに面會人の多いことは、多い日には三十人もある。初めの頃は金せびりまでが随分と来た。面會日は木曜ときめて門の扉に木の札は掛けたが、ほんたうにこちらの仕事の爲に考へてくれさうな人はさして有りさうにないのでしみじみ困つて了ふ。そしてかんじんの面會日にはわざわざ時間をあけて待つてゐるのにほんの一人か二人しか來はしない。さうして面會日の札まで誰かが盗んで行つて了つた。

わたくしはここへ越して來てから一晚と落ちついて自分の時間を持つたことはない。

こんな事が續いたら、わたくしは滅びるほかはないのだ。仕事ができないくらい苦しいことはない。病氣になりさうだ。

つくづく小田原の壞はれた木兎の家に歸りたくなつてゐる。

白 秋 の 墓

ぎよつぎよつと蟲が鳴いてゐる。縁側の硝子障子をすつかり閉めきつても、流石に秋の夜は心もとない感じがする。わたくしは卓の上の青磁色の鉢に盛られた甲州葡萄をつまみつま

み、日暮里の汽車や電車のとどろきを聴きほれてゐる。

今日は院展の最終日だったので午後の三時頃から妻と出かけて見た。久しぶりで見えた山本鼎君も途中まで一緒に出た。さうしてまた白秋の墓の前を通りかゝつた。

「これだよ。」

と、わたくしは指さした。

「なるほど。」

と、鼎さんも近よつた。

それはこの家の門前から、つい右斜の空地を抜けて、やゝ青錆びた白の石造の圓塔——それは納骨堂であるが——の横をはひつて、左へ二つ目の、それはものしづかな墓地の小徑のほとりにあつた。

白秋若目田君

之墓

同孺人菊地氏

と、かう並べて彫つてある。墓石はさして目だたぬ並みの高さで、もう相當の薄墨色に燻

んでゐた。

「わたしの名の字まであるんですよ。」

と、菊子が言つた。

「や、さうですね。妙なこともあるもんだな。」

と、鼎さんがまた見入つた。

「何だか僕たち夫婦の墓のやうな気がするよ。初めは驚いたが、この頃はもう寂しくなくなつた。それより却つてなつかしくなつて了つたね。いつでも通つて見るんだよ。横に廻つて見たまへ、いろいろ書いてあるから、ほれ、この白秋と云ふ人は明治二十年一月の二十四日に死んでゐるんだよ。僕は一月の二十五日、僕はその翌日に生れてゐる。だが二年ちがつてゐるから生れ變りにはならないね。それだけは残念だな。」

「だが、かういふ人が前にゐたのかね。」

と、鼎さんも外へ出て、また振り返つた。それから三人で少し歩いて別れた。涼しい、日和であつた。

君諱禮直通稱久庫白秋其號也蓋取干靈臺穴瑩白於秋之義矣
とも彫つてあつた。

資性潤達廣額豐頰隆準高鼻威貌正嚴一見知爲偉人其所爲規模頗大

ともあつた。これはすばらしい。たまたまわたくしと此處に来てこの數行を見せつけられた人は、

「や、これは君そつくりだよ。」

などと面白がつた。

「容貌は似てゐるだらう。」

と、わたくしも顔をあかくした。だが、

明治維新之際盡瘁不少然事與志違軼軻不遇終不得志

で、すつかり悄氣て了つた。

「だが勤王の志士だから頼もしいよ。」

「や、晩年好圍碁稍長其技、はゝあ、碁碁の初段と云ふところだね。」

と、或る時のわたくしの連れはその眼で笑つた。

「策碁の初段とはなさないね。」

その白秋の墓を初めて妻が見つけて来て蒼くなつて飛んで歸つたのは、わたくしたちが引越してまだ間のない頃であつた。天王寺墓地には樟の新芽が朱金に輝いてゐた。

「そんなことがあるものか。」

と、その時わたくしは信じなかつた。

いつたい、わたくしの雅號白秋は苦心して附けたものではなかつた。中學の三四年の頃、文學好きの同級生の誰彼と廻覽雑誌を出すことになつて、そこでみんなで籤引にした。それでわたくしが引當てたのが秋の字であつた。で頭に白をすべてがお揃ひに附けると云ふ約束だつたので、白秋となつた。極めて無意味なものであつた。それが北原と云ふ姓にしつくり合つてゐるので、その儘にとほして來たのである。(尤も上京當時若山繁君と同じ下宿にゐて、向うが牧水こちらが射水、もう一人が蘇水で、早稲田の三水などと喜んでゐた事もあるし、泣菫流に薄愁などと、書き換へて見たりしたが、それもぢき飽きが來て、また初めの白

秋に還つた。) 本來から云ふと極めて枯淡な雅號で、さもほそぼそと消えも入りさうであるが、自分の初期の詩はその反對にあまりに絢爛であつた。志賀直哉君がその向うを張つて、南紅春などと戯れに自稱してゐたこともあつたと思ふが、南紅春の方がずつとわたくしの詩風を表はしてゐたかも知れぬ。だが、北原白秋と云ふわたくしの、この寂寥極まる姓や雅號が、不思議に世間に華やかに感じられてゐるらしいのはどうしたことだらうと思ふ。つくづく考へるが、この四文字は晩年になつて初めて名實相添ふるものになるのでないか。さうした氣もしてゐた。この頃になつてその方に少しづつ近づいて來たから妙である。

素秋と言へよう。然し白秋と云ふ熟語は怪しい。わたくしは籤引で當てたのだから。だが五十一でなくなつた若目田氏顯松院白秋直方居士は、少くとも感覺の鋭い人だつたらしい。白を選んだのがさうである。

わたくしは驚いた。わたくしの前に第一世の白秋があらうとは。何だか他人でもないやうな氣もした。

で、褐色の花粉のまだべとべとした大きな鐵砲百合が、すぐその後でわたくしたちの手で

獻げられた。

「僕の墓があるよ。」

と、わたくしはよくわたくしの家の客人たちに話した。

そればかりでない。石井道子之墓と云ふ、處女時代に亡くなつたわたくしの従妹と同姓同名の墓も、ある日の墓地の逍遙に見つかつた。それを聞いて、「君、青山の墓には齋藤茂吉之墓と云ふのがある。」

と、古泉千樫君がおどかした。

それから、わたくしは散歩する度に白秋の墓の前を通る。一度は通らねば気が濟まなくなつた。何かあつてどんなにむしやくしやすする時でもその墓へさへ遊びに行けば、じつに心が安らかになる。閑雅ないゝ木かけである。自分の死後の静けさをもわたくしは其處に感ずるのである。いゝものだなと思ふ。

わたくしは妻や子供たちと出る時にはきつとその前を通る。さうして頭をさげる。

「や、白秋の墓だ。」

と、坊やが走る。不思議なことには、何時も墓地の迷路にはひつて了つて、やつとしまひに抜けて出て、ふと氣がつくと、後から白秋の墓地の柵の中に立つてゐる自分を見出すことである。また外からの歸りなどにいつか無意識に曲つて来て立ちどまるとまたその墓である。夏ちゆうは白い蝶などがひらひらとそのあたりを光りながら飛んでゐたものだ。秋口にはあかい百日紅の花がちらちらとその空へ咲き初めた。だが、その季節も過ぎた。これからほんたうに白い白い秋が來ることであらう。どんなにまたその頃はわびしいか知れない。夜がふけた。蟲の音が、汽車のとどろきが。

庭を眺めて

寒さむとした庭になつた。落葉木が枯れ、常盤木も刈り込んでからはすつかり細みが目だつて來た。そこらが廣くもなつた。明るく見えるやうでも、頼りない冬の日のあたりである。ゆうべはことに霜がひどかつたか、青木の葉のそばの犬笹などもこれまでになくぐつたりと萎えきつて見える。土は凍つてからからに乾いてゐる。かんかん音がしさうである。

硝子戸越しにかうした庭を眺めてゐると色々のことが考へられる。

私も詩歌の道に入つてからもう彼是二十四五年にはならう。幸か不幸か人にもうはべは知られて來た。俗名の厭はしさにもつくづく苦味を覺えてゐる。然し眞によく知られてゐるとは思へない。といふよりも私の書いたものが一々に細かくよく讀まれてゐることすら極めて怪しいのである。自分自身さへが昨日のことは兎角忘れがちなのである。他の人に私の書いたあらゆる作品の隅々までも正しく觀られて正しく知つてもらへようとは思はれない。

ただ、私の眞に苦しみ、また眞に遊びほれた、私自身に少しでも自信のある作品と思ふものは解せられず、自身でも赤面するやうな低學年向きの童謡のあるものや、民謡の中でも劇中の時花唄として假初に作つて意外に流行したあるものなどによつて却つて世に普ねく褒貶されると云ふことの方が多かつたとなると、心はいよいよ寂しくいよいよ省みがちになる。一般民衆に知られてゐると云ふことも、ただ漫然と、さうした低いものを通じ、ある群衆心理を通じて知られてゐるのであらう。

私の歌詞はよく作曲される。然しながら多くは自分にもうち棄てゝ了ひたいものが、とも

すると作曲家たち選ばれてゐるやうである。これも寂しくないことはない。放送されるラヂオの童謡民謡なども、自分の家庭で自分の愛兒にも聴かせたくない曲や甘い聲の獨唱にも惱まされる。旅などをして邊鄙の酒場や、または都會のカツフェなどで、安白粉の女給たちや氣障な青年たちに歌はれてゐる自分の民謡などを聴いては、全く耳を蔽ひたくなる。萬ざらうれしくないことはないが、時としては我自ら俗情の囚になりかけることもあるが、自分の顔を知られずしてよかつたと思ふことはいつもである。

知識階級、殊には同じ道の詩歌人の間にでも、考へるとどれだけ親切に觀てもらつてゐるであらうか。私は私の詩歌に對する極めて稀々な批判を受けて忝く思ふ際にも、あまりに讀まれてゐないことに驚かされてばかりゐる。時としては人々によつて全然相反した言葉さへ聞かされることも珍らしくない。私の一部一部は私の全面では有る筈がないと思ふものを、十分には見ず、讀まずして斷定的に何かと極めてかゝる向きにも出あふ。

私は可なりに論議もした。然しながら論議などはよくどうどうめぐりをするものである。ともするとこちらの意見までが相手のものとして逆襲される。誤解の上に花が咲く。かうな

ると何の爲の論議か果しもつかなくなるものである。

私は私と私の詩歌とを愛好するといふ人々の訪問を頻繁に受ける。然しながらまたさうした人々の十中の七八は酒興のうへのゴシップ種や謬られた世俗的の噂を通じて、私や私の家を見に来る人か、さもなければ私の初期の聞いても齒が酸ゆくなるやうな感傷體の詩歌やほんの一二の童謡或は民謡小唄の集ぐらゐを通じて知つたと云つてくれる人かである。その間にも私ごとき者の短冊を賣るためにせびりに来る人もある。僞つてまでも来る。さうした時は僞られたふりして書いてやることもある。眞に私の創作の時を惜しんでくれ、または詩歌について眞に私をたゞいて聴かうとする年少の人は尠く、單に出世の爲の利用を主として逢ひに来る向きもある。ほとんどかうして私は自分の道そのものに遊ぶ暇さへ奪はれがちである。

さうは思ふものゝ積極的に動かうとする私にあつては止むを得ぬことにも思ふ。ただ私はどういふ煩鎖な中にも複雑した世の種々相の間にあつても自分の守持だけは確乎と据ゑて、据わりよく正しくあらうと思ふ。他に知られることよりも自身に先づ自身を知ること、自分

を深く見究め、自分の道を常に保つことが私には大切である。

かうした冬の日の眺めは寒いが、却つてしみじみと親まれもする。私にも年輩相當に物を觀、聲を觀る眼がどうやら開いて來たやうである。

——「都新聞」大正十五年十月四、五、六、七日——

白く耀くもの

北越の大吹雪はラヂオのニュースで聴いて、毎夜のごとく胸を引きしめられた。随分とひどいものだったらしい。暖かい小田原に永らく住んでゐたせいか、私にはこの東京の今年の寒さには堪へられなかつた。この書齋も一日中日光が射さないで、朝から反射ストオブを点けたり、電燈を点けたりしてゐる。この陰鬱さは私をもうせんごけのやうにしてひさうである。こゝでかうして終日仕事をしたり、夜を徹して詩作などをしてゐるうちには何だか私自身の生長まで留りさうに思へる。ことに一月の下旬からこの二月の下旬にかけて、私はほとんど病氣しどほしであつた。あまりに底冷えの深い冬であつた。私は胃腸をいためて永らくお粥をすゝり續けてゐるが、肉食ができないのと、酒をたまには喜ぶので、それなり健康が元通りにはなりきれないのである。それに感冒には犯される。しぜん床を敷かせては引

籠りがちであつた。それでもすこしの静閑さへ得られなかつた。相變らず私は忙がしかつた。谷中の墓地は冬枯の景色になつて、また更に幽雅の趣を加へた。雪の日の暮方などに白い五重の塔が廂のつまを反らして閑かにもんもりと煙つてゐる眺めはこの上なくうれいものであつた。小徑は小徑で人通りもないので、ふり積つた雪は積つたなりに柔かに明るく光つてゐるし、圓い石造の納骨堂の周圍などはふんわりした處女の膚の清らかさであつた。それに私の親しい白秋の墓の頭には雪が童の帽子のやうにつもり、地上の雪には百日紅の枯枝から雫した幽かな點々が薄青く沁み凹んでゐたのも細かであつた。

この家の庭にふりしきつた雪のちらちらもそれは細かな濃いものであつた。風はなかつたし、雪は眞つ直に、しかも空に満ち満ちてその白い羽蟲の翅ばたきを遍ねく繁く深めて來た。見る見るそこらが白く、また影の薄紫となつた。圓刈りの躑躅にもつたなんと細かい雪のたまりであつたらう。實のまだ青く、葉の萎えなだれた青木のむれには久しく迄つてもらなかつたが、それでもいつのまにか白く明つて來た。楓や菩提樹や檀や梧桐の枝々にもつた雪の盛りあがつて白く閑かなのもひとしほ冴えて勻つて來た。いつかの大霜の明方に青い

綺麗な小禽のセキセイインコが、何處から飛んで来たものか、凍えて落ちて死んでゐた庭石のあたり、ひと叢の犬笹の葉にもつた雪もいよいよまたあはれであつた。その日の暮に、私は二三の人々と、墓地をぬけて、上野の櫻木立の間を山下へ出たものであつた。仁丹の灯が雪曇りの空に高く紅く、浅緑の、また橙色の電灯が瑞々と鮮やかに壯麗を極めた都會の雪景を、私はまたひさしぶりに眺め入つた。すべてが新らしく若々しかった。

雪の後、日を経つまゝに庭の柚の葉は黒くくすんで来た。躑躅の細かい葉もちりちりちぢれて来た。それからもきびしい寒がつづいた。木の根や石のそばの雪は凍つて、搔いて見ると、乾いたからからの土の膚が現れて来た。

御大葬の夜には、私は病を押して、紀國坂までタクシイで飛ばした。それでも三重の警戒線の上の高みで、遙かに辨慶橋あたりでうち振る巡查の提灯の黄赤い列だけが目に入るのみで、たうとう御炬火の炎も拜めなかつた。嘸嘸と喇叭が鳴つた。白鷺のむれがお濠から亂れて蒼茫として清水谷の森の上で舞つた。それさへもあまりに幽かであつた。そのうちに私たちは突然下から寄せて来た巡查の群に追ひ返された。理由も述べずに無理押しに押し返すの

であつた。「もう二十分も前にお通りになつて了つた。」などと見え透いた虚言で、それで傲然と、私たちを敵國の民であるかの如く腕をこづきこづきしたのである。私も心から憤慨した。無位無官の詩人であるので爲方なく踵を返すより外無かつた。思ふにあゝした群衆の中には大君のために祖國の柱の一つとなるどれだけの功績者があるかも知れないのである。私は寂しくないことはなかつた。然し何が幸するか知れない。四谷見附の大篝火の見えるあたりまで揉まれて来たところで、私たちは思ひがけず葬場殿に赴かせらるゝ今上陛下の行幸を拜し得た。天皇旗、旗槍をかゝげた騎馬の儀仗兵、黄の緑の灯を鏤めた燦々たる御自動車、私ははらはらと落涙した。

昨晚、ラヂオで、私は私の謹作した今上陛下奉賛歌「昭和の黎明」の獨唱を聴いた。感慨無量である。私はつくづく「日本民族の歌」を大成しようと思つた。祖國のために、祖國のために。

大いに振興すべきはまた、昭和の日本の民謡である。

この二月の寒さもいよいよきびしかつたが、私は病中ながら多少の感興を得た。私はいつ

のまにか「白く耀くもの」の氣韻に心をひかれて來つゝある私自身を私の詩に見出した。私の心には深く、白く耀く花鳥圖が勻つて來つゝある。

——「近代風景」昭和二年三月號——

白きものの陰影

ほうやりとして

ほうやりとした面もちであつた。

私の山莊のとなり、貧しい山寺の日おもて、本堂のそばのさゝやかな一室を借りて、その古ぼけた障子の内に、いつからともなく住みついた二人のお婆さんがあつた。私は話には聞いてゐたが、どういふたちの、どうした姿の彼女らであるか、ついぞ見かけたこともなかつた。その高い縁のしたの、庭とも畠ともつかぬ落花生の畝や、張りの強い蒟蒻の葉の間を、私はよくひろひろひ出入りしたものだ。しかし、その部屋の障子はいつでも白く閉めきつてあつた。物音ひとつ咳ひとつ耳に聴くこともなかつた。

それが開いてゐる。と閑かに坐つて何か空を見上げてゐる二人の、お婆さんとお婆さんが私の眼に映つた。

そこらの賽路や、墓地、孟宗の林の中などは、ちやうど白い梅花の盛りであつた。山寺のことではあるし、明るい中にもさびしく、長閑かなうちにも雅びて、春もまことにあはれと眺められた。蒿雀あむせきのこゑも動いてゐた。

ほど近い潮騒の響も、間を隔かいては閑かに、裏山の松風の音ともこだまし合つてゐた。

さうした日おもての眺めを、いかにも安らかさうに眺め耽つてゐた。皺ふかい、白髪の、さうして白面の、品のいゝ二人の姿であつた。

ほうやりとした面もちであつた。

それだけの話である。

その翌日も、その部屋の障子は開いてゐた。だが、二人のお婆さんの影も形もその内には見えなかつた。手まはりの何一つも、目にたてゝ見る塵の一つもなかつた。ただ向うの裏庭のやゝ小高みの斜面に、古蒼な二本の白い梅の花ばかりが日に照り明つてゐた。

閑雅なものであつた。

白　い　満　月

白い満月の面おもてには、ほのかな紫の蟹の形がまだ残つてゐた。

孟宗の豊かなしだれのうへ、青く透つた曙の空のうつくしさは。

私は露臺に出て、白い大きな蛾のむくろを、右の五つの指さきからかくるく飛ばした。

「なにかまた悪るいしらせでもなければいゝが。」

人間のたましひといふものは軽い軽い幽かな物の背に乗つておとなふものだといふ。たとへばかうした白い蛾の翼のやうなものに。

ゆふべの月の光のいよいよ明るく澄んで来る初夜過ぎのことであつた。私はその月の光の耀きを面ちゆうに眩しく感じながら、一房の紫の葡萄を手に、口を開いては、一粒一粒を、さげたなりにその房のさきから食ひとつてゐた。まるい葡萄のたまがほろりと口のなかへはひると、ころりと咽喉を通つてゆく。

葡萄の圓光、葡萄の圓光。

一粒一粒、光と香ひと雫とがほろりころりと私の咽喉をころげてゆく。私の胃の腑も光つて満ちた。

と、白い大きな蛾が、月と葡萄の間をひらひらとかすめたのである。

硝子戸の外はいつまでも月の光に蒼かつたが、その蛾は私の寢室にそのひと晩ちゆう白く白く粉つぽく羽ばたいてゐた。さうしてこのあけがたに私の白い枕のうしろにその重たげな大きな羽根を落して休んだ。いや、死んでゐたのであつた。

私はその美くしい白い眉の飾りや、同じ白い下羽根の朱の點々やにつぶさに心をひかれながら、ほうとその一つのむくろを白い満月へ向けて投げた。

「なにかまた悪いしらせでもなければいゝがな。」

だが、私はまた私の白いベッドにもぐりかけたところで、私の眼を爽かな朝の空氣と微風とが水つぽく追ひかけて來た。

私は睨毛をしばたゝいた。

硝子戸の片扉を閉めわすれてゐたのである。

枕もとの白い薄絹の窻掛がまた私の面の上に吹きあふつた。

何といふ透明な、こまこまと生きて光つた蛾の卵の圓形圖であつたらう。

私はベルの鉦を押した。

もうひとつ、ゆうべのやうに仰向いて、房の葡萄をゆらゆらと食ひとつて見たくなつたのである。白い満月に向つて。

父の髯

父の髯は白い、白くて長う垂れてゐる。

私は盃を下に置くと、ふつとその白い髯のさきに私の掌をあてた、さゝげすくふやうに。

その瞬間、私の掌は父の全身を感じた。

父の眼は私の眼と見あつた。

父と私の眼からは涙がながれて來た。

緑ヶ丘風景

朝は呼ぶ、

澄明な空気と、日光と、爽かな新樹の緑と朱とが私を呼ぶ。――

――ほうい、

――ほうい、

――ほうい。

なんと快適な緑ヶ丘の風景であるぞ。私はこの丘に来て、初めて曾ての朗らかな山荘生活に還つた歡びを感じる。

私は健康をとりかへした。

麥酒と、生の胡瓜と食鹽と、さうして焼きたてのパンとバタと、この簡素な食堂は時として庭園の芝生にまで延長される。

駢けよ、駢けよ、子供たち。

ほういさうか、ほういである。

思ふに谷中の生活は幽雅ではあつた。廂の深い、古風な家の閑寂もあながちに私の詩情とかけはなれたものではなかつた。私はさうした氣品をもしみじみと愛しうるのだ。然し、私の常に躍る若い靈の中にはまださうした「老い」の中には安住しえない腫の耀きがある。私はまたあの墓地裏の陰濕と煤煙と、朝の間から電燈を點けねば物も書けなかつた暗い書齋とから全く解放された歡びを感謝する。

魚は清水の中に還つたのだ。

息がつける、息がつける。

再び私のものとなつた、明快な洋風の書齋が、さうして子供たちには南天の星座が、それにしても、この階上から観る鮮麗な夜景はどうだ。
灯の溪谷である、まさしく。

瑞西、瑞西。

密集し、また點綴する。盆地の、また遠くの丘陵の、灯、灯、灯、灯。

その中で最も大きく光る紫の燭光、あゝ、あれはキネマの燈だ。

さうして月が東の木原山からあがつて、その弓なりの道を南へまはつてゆく、夜風が硝子扉のそとを駆足で光る。

この緑ヶ丘は赤と緑と青の屋根の、種々雑多な建築様式の所謂文化住宅の波濤の中に突出した一つの岬である。

この不可思議な、恰も童話の世界の夢と光と色とを三方に俯瞰するこの丘のこの家の位置は、確かに小さな王城の所在地である。現実ならば西歐の一つの部落に於てはまさにその教

會堂の夕映でも見るべきである。

ある人は誇張して言つた。「これは白秋城だ。」と。

さほど高くはないが、坂はやゝ急である。この崖の上の坂を、その上の高い崖に添つて、登りきつて左折したところに、素朴な形ばかりの木の門柱がある。私の愛する訪問客はこの門柱に通草の蔓が絡んで、薄紫の細かな花穂を幽かに綴つてゐる初夏の新趣を感じるであらう。籬の上手には菖蒲の緑の列が日に日に深くなつてゆく。いづれは芝や薄の間に紫の花がそこらの光線を一層明るくするであらう。門をはひるとヒマラヤ杉の三四本がある。入口の軒のかけには小さな釣鐘と撞木とが下つてゐる。その釣鐘がカンカンと鳴るのを聽いて内からはドアを開ける。

この家は何の贅も凝らしてはない。俗に飾られてもない。簡素である。緻密な、さうしていゝ趣味の頭腦の持主であつた或る建築師の自らの家のために設計し建築した赤屋根の洋館である。入口から奥まで見通しの廊下になつて、左に客間と食堂のヴェランダ附の子供部屋

があり、右に女中部屋と踊り場で曲つた階段があり、臺所があり、湯殿がある。階上は納戸と十二間の床附の日本室と洋風の書齋と寢室と日光室がある。それにWCは階上にも階下にもついてゐる。それだけのものである。

明るい、極めて明るい。風は時として強く硝子戸をたたくが、空気は涼し過ぎるくらゐ透明である。

盆地の童話の市街を隔て、北東南三方の丘陵がまた、新樹と青い畠と、蘇格蘭式の、または近代の急勾配の赤屋根と楚々たる白い洋館とをもつて、遠近の風光を立體的に浮きたし、霞ませ、また耀かす。

眼に入る煙筒の數も二つか三つしかのもので、それらは村の浴場である。煙は直ちに大氣の青みに消えてゆく。その餘は電柱の碍子と電線の紫が空中に目だつのみである。

「まるで高原のやうだね。」と私は言つた。

庭の芝生には、夏の日覆として三本の梧桐が、窓近く並んで、いまは若葉の赤みが枝々の

尖端にほぐれ初めた。

芝生の南と西の横手には花畠や梨棚や野菜畠がある。木にはプラタン、ポプラ、栗、銀杏などが、素朴に、しかも或る巧まぬ秩序を以つて植ゑられてある。茶人向きの凝つた庭づくりでないのがいゝ。その間に低い梅、躑躅、ふぢ、錦木、細い孟宗、枇杷なども交つてゐる。細かに觀てゆくと、落、百合、苺、菊、山吹、菖蒲その他の雜草までが注意ぶかく植ゑこんである。

綠ヶ丘では草わけの洋館だといふことも私は聞いた。なるほどさうだと思はれる節々が、かうした庭の思ひがけない崖はなにも目につく。

さうして今は躑躅と木苺の花の盛りである。

谷中から引き抜いて來た子供の滑り臺は白と藍のペンキで塗つて、籬の内の北の芝生に建てることにした。その前後の門や木戸から、前の道路に出ると、すぐに崖の端になつて、其處からも盆地の文化住宅が色彩の複雑な表現派の風景を以つて迫る。大佛や蛇窪の丘がその

向うに微風の野菜畠を見せ、人家を見せ、煙を見せる。
異人の女の子が切り通しのレエルに添つて駈けて来る。

青、赤、緑、黄、紫、——花壇だ。芝垣だ。露臺だ、ペンキの柵だ。

この通路をこの家の前から、丘つづきに西へ向つて歩いて見よう。

赤屋根と錆色の羽目と白い窓枠と前と後に殆ど同種同型の洋館がある。これは隣人の家だ。それから卵色の白と藍のライト式瀟洒な小住宅、續いて白屋根と白い窓枠と錆色の羽目のやゝ大きな獨逸人の家が二戸三戸、低い石の門に白ペンキの扉、植込み、時には窓があいて勝手の大きなフライパンが見える。金髪のお婆さんが顔を出す。眼の青い男の子が駈けて遊ぶ。

これは少くとも日本ではない。南方の植民地の風景である。

時は初夏の午後三時、大きなパラソルをさした母親に手を曳かれて向うから来る亞麻いろのシャツの子が何と笑つて私に挨拶したか。

「こんばんは。」

工事中の切り通しがある。レエルがある。セメントの橋臺がある。赤い鐵橋の材料が投げ出されてある。

それから粗末な假橋がある。この切り通しの遙かの上と下とにまた幾つかの假橋が見える。樺の新緑が湧き立つて光る。

まるで油繪風である。

橋を渡ると麥畑がある。洋館がある。

大木の椿が花をいつばいにつけてゐる。落ちてゐる點々の紅もある。黄牛もゐる。

と、農家がある。竹藪がある。苗床がある。菜の花畠がある。

棕櫚がある。赤い家がある。芝生がある。

と、また谷があり、畑の斜面があり、牧場がある。

街道がある。トラックが走る。自轉車の輪が光る。

幾棟か續いた巨大な温室がある。
温室の中は薔薇とカーネーションの紅と白ばかりである。
身軽な洋装の婦人が切花を片腕に眩ゆいほど擁へて来る。
スチームの湯気が立つ。
私たちは帽子を取る。
「洗足の池へはどちらへ行きますか。」

新開の道路は縦横に通じてゐるのである。このあたりの丘つづきは何處からはひつても、また廻り道しても、景趣はいよいよ鮮麗である。
田圃のわきの野菜洗ひ場の菜つ屑、おたまじやくし、畦のはこべの空いろの花、或は馬鈴薯畑、榛の實、白木槿の花、筍の出た浅い竹藪。
椿、椿、馬込の椿はじつに花の數が豊富である。私はその色の紅さにも驚いたがその數の賑やかさにも更に目を瞠つた。

「椿はこんなに花が多いものか。」

麥畑の向うを赤い運動帽の新聞配達が駆けてゆく。蠶豆畠の下の農家にもアンテナがある。洋装の子が球投げをしてゐる。百姓の子だ。

それから電柱の行列である。

下つてまた上る道路に添つて、チョコレート色の洋館がある。全くお菓子や玩具のやうな彩色の家が綴點してゐる緑の畠の傾斜面に夕陽が染まると、紫の人影がラケットを振りふり「左様なら。」「左様なら。」だ。

蘇枋の花が紅い紫で、苺の花が白く、茱萸の花がちらちらで、チュウリップが黄と赤の兵隊さんだ。

「箕子ちやアン。」と、私に手を曳かれてゐる上の男の子が叫ぶ。

ちやうど、ひと谷を隔てた久保の丘の赤い家のわきの坂路の途中で、私たちは、向うの私たちの家の階上から、母に抱かれてハンケチを振つてゐる小さな子を見つけたところで、駆

け出した上の子である。

「あつちやア。」と向うでは呼ぶ。

パツと藍色の電燈が点く。

パツとまた階下の食堂の電燈が点く。

紅だ、紅だ。

近代風景、近代風景、

少くとも緑ヶ丘は快適である。

——「近代風景」昭和二年六月號——

窓から

この窓から観る風景の涼しさを私は書かう。

高雅な梧桐の花である。白茶色の細かな荅が穂に群れて、すでに三分は開いてゐる。ほのかな白だ。光と風とがその花の穂と、廣い葉のむらがり揺する。お、蜂が来た、新鮮な黄と褐とのだんだら縞の蜂、梧桐の花から花に縋り縋り、枝と枝との薄青い空間を浮いてゆく。

またひとしきり涼しい風が音をたてる。

ひらひらひら。黒の刺繍の縁に青磁の地の揚羽の蝶が急速に上つて逸れる。

梨棚のすはえも明つてゐる。まだ小さな實だな。

羽蟲、羽蟲。

蝶、蝶、蝶、蝶。

あつ落下傘ぼらしゅつとが落ちた。梧桐の白い花、花、花。

なんといつまでも鮮かなバタいる蜘蛛の空中遊泳だ。

下には蜻蛉、日向のトマトのつつかい竹、そのてつぺんの光、光。

ちえつちえつちえつちえつ、雀、雀、雀、雀。

椎に栗、越して盆地の菜の畠、孟宗の新緑、小豆いろなは向うの丘の文化屋根。

空は曇つて、輝いて、火の見の塔がわづかに見える。

シュッとマッチを私は擦つた。

いゝ煙草だな。

——「讀賣新聞」昭和三年七月——

緑ヶ丘の秋

10. 9. 1927

「さゝ朝だな。」

と、私は家を出る時、うちのものを見返つた。開け放つた入口のドアの前には、細かな砂利の舗石に、細かな葉のひまらや杉の参差たる影が動いてゐる。その土用芽は、まだ新芽のやうに柔らかな白と緑である。空は洗はれたやうに水いろですがすがしい。軽い白い雲も浮かんでゐる。この二三日來の濛濛たる雨氣がやつと霽れたのである。

私は白茶の麻の仕事服をつけてゐる。ポケットには鉛筆や煙草やマッチをがらがらさしてさうして小さいノオトを片手に持つて、かうした朝のいさゝか精密な寫生をしておきたいと思つたからである。

素朴な門柱の上の電球を透かすと、何かこの午前の光線にチラチラしてゐる。線が切れたのでないか、それとも蜘蛛の絲かしらんと、また透かして見る。笠もはづれたきりだが、門札も名刺を貼つたまゝになつてゐる。もう字が濡れしづくになつて薄れて了つた。これもどうにかしなければなるまいと思ふ。一日會員といふ木の札も前の主人からの持ち越しで、今は古く黒ずんでしまつてゐる。

蓼が咲いてゐる。末になつた鐵道草に交つて、鮮やかな露草の花が一輪、電柱の根にはそれらのそよいでゐる影、影、影。右の籬の下の刈込んだ草土手には二、三株の青い薄がさやさやと残されて、珍らしくしだれかけた萩の花の紅紫あかむらさきには露がいつぱいである。

この門前は崖うへの道になる。その崖の端で目につくのは名も知らぬ埃つぽい雜草、ほうけた蓬、ゑのころ草の類、それに瑠璃いろの、黄の蕊の露草の大群、それはすばらしいものだ。

蜻蛉が来る。頭の青い、網翅の透いた、胴の白つぽい藍、まるで乾いたペンキ塗りである。猫じやらしの穂。

なんと盛んな雀の聲だ。驚いて振り返ると、うちの前の切りそぎ崖を近景とした赤土の盆地の原つぱの向う、急勾配の小豆いろの瓦屋根、その窓の下の廂の、または飛び翻る、地に下りる、翔け立つ雀、雀、雀、雀。その外の濡れ土、茶褐の竹煮草の穂、薄、茅萱、一面のそよぐ風、風、光、光、光である。

その隣が赤瓦の藍のバルコンである。重疊した赤、青、緑のいはゆる文化村緑ヶ丘の風景の後ろ、向うの赤松の丘、その丘には煉瓦の煙突のついた古風の赤屋根が見える。あれが天下の絲平の別荘だ。その空に白い積亂雲。

ポプラ、ポプラ、里芋、白の緑の野菜。

さうしたこちらの家と家との、庭と庭との間隙である。

「ほう、今ごろになつて、栗の花が咲いてゐる。」

返り花かと私は見てゐる。それはつい眞向うの鞆轡の見える赤松の小丘に續いた繁みである。日當りの家が二、三戸、けふは子供が騒がない。學校が始まつたのだ。

切り通しのレエル、やはり緑の急勾配の屋根の、階下は總ガラスの日光室の前の芝生、そ

の下の踏切を、印半纏の胸は露にはだけた若者がすたすたである。

さて私は崖の端の道を西へと歩き出す。隣の三牧さんの家もうちと同じ赤屋根だが、その隣は卵いろと白つばい空いろで塗つてある、ライト式の明るいな家だ。庭のしきりは道に沿つて白ペンキ塗りの柵がある。朝顔がからんで花はあはれに萎しへてゐる。内はコスモスのほうほうとした草藪で、薄桃いろの新鮮な花がちらちらと二つ三つ光つてゐる。

日に光るアンテナの棹、若木の椎の葉、畑の細い電柱には何かの蔦が匍ひのぼつて、秋色まさにとゞのひつゝある。

コンクリートの段々、低い石の角柱、一對の檜葉の鉢、電話大森何々番。

と、その隣、極めて長細い舗石道と入り込んで、両側には今や燃えたつ黄の朱の葉鶏頭、菊の葉、紅と白、やゝ紫がかつた朝鮮朝顔、奥にちらちら黄の點々は浦島草。影と光が明らかなのに、土にはかすかな水気が立つ。いつか見知らぬ魚屋が板臺かついで肩を揺り揺り出て来たところで、私は聞いた。

「えゝ、この奥ですか、洋館ぢやありません。この霜田では草わけの古いおうちでさあね。」通り過ぎると、ドイツ人の家だ。紅毛人はまつたく生活を楽しんでゐる。ちよつとした庭にでも、テニスを出す。椅子に對ふ。カアテンの色を選ぶ、夜は色々の電球を明るく、一時ごろからピアノが鳴る、ダンスが始まる。今日は主人公不在と見えて、籬には蘇枋の細い果の房ばかりが赤く目だつてゐる。椎にからんだ朝顔の納戸と紫、リリリリと閑かな蟲の音。曲ると白ペンキの低い山形の扉、子供が飛び越しさうな右の門柱。W. Timacus.

こゝで俯瞰す。

まだ施設中の單線レール、その土手に放り出した鐵材、角石、壊れたトロッコの車。御用聞の小僧が歩いて来る。

その鐵道の高い土手で兩分された北の盆地の、向つて左はまた、ごちやごちやの小さい文化住宅地である。あちらこちらの庭の草木に主人たちが歸つて水を撒き、燈をつけ、蝸の聲のしぐるゝ日の暮方はさすがに近代の物のあはれを感じしめるが、晝間はやゝあからさまに、

その窓、小縁、物干、さては書棚や蓄音機やマンドリンが見え過ぎる。赤瓦ばかり載せた新築中の家もある。屋上ばかりが蔦で緑の家もある。枯れた向日葵の黒い圓莖、唐黍のからから穂、まだ咲く前のコスモス、何か黄に残つた花、花、花、浴衣は棹に、梧桐の若木にすずしい風。

例の青屋根の前の踏切を、今度は東の方からステッキをふりふり、麥稈帽の片手に包みを持つたがちよこりちよこりと上つて来る。

「やはり秋だな。」

その西隣の芝生には母と子の白い夏著、ほかに一人二人の影が出て、また裏の方へとまはつてゆく。

松、松、向うの蛇窪の丘、菜菔、茶褐の黍の穂の列。白い綿雲。

えんやらさあのどっこいさあ。

と、右手の町筋、都キネマのあたりから、ちんからちんから、飴屋かなんぞの囃子がきこえる。ばんばんと何かうつつ響もする。と、こちらの盆地のうしろでは、もうと一息、雌牛が

吼えた。孟宗藪があり、椎檜の林、松の古木、村社、たうもろこしの葉のひかり。

崖の端が斜面の西瓜畑となると、レエルの方へと下りる道がつけてある。蓼、かやつりぐさ、へくそかづらや鐵道草に縁どられたその斜面の西瓜畑には、花が黄いろくいまだに咲きのこつて、飛ぶは蜻蛉の翅と影、急に追つたり、逃げ逸れたり、それに幽かな羽蟲も浮く。閑かで、さうして眩しい點々、目にもとまらぬ微塵の蟲の亂れである。かうした秋の昆蟲の生活相こそは生きてゐる。

姫蓼、わづかな紫蘇の葉、かづらの蕾の浅みどりに綻びた褪紅の花。崩れた土に現はれた白い細根。濕つた蟲の音。

紫褐の穂ではこぶなぐさ、淡緑色のちからぐさ、同じく放射線にほふうしのしつべい、あきめひじは、あぜがやつり、線香花火のやうな穂もある。何とか菅とでもいふやうな緑の穂には小豆いろのこまかな花がちらちらして、莖には銀の纖毛がふるへてゐる。その芒を一つ引抽いて噛んで見る。竹煮草の花は果の房になつて、その躑躅の莢の一つに爪で當てると

ぴちりと音がして朱の液が出る。

と、さうした草叢に捨てられた白い團扇である。女の子の寫眞のついた資生堂月報である。おや、アルスの日本兒童文庫の小さなパンフレットがある。赤い房つき帽子の道化が二人で、メロンか何かを抱き合つてゐる。

「いまは、日本のこどものたべものは智慧の實です。」

と赤文字だ。誰が意匠したのかしらと微笑する。一本の梧桐、その蔭には篠竹を山と積んで蓆をかけた、前が菜島。

また引つ返して登つて見る。ドイツ人の家の前だ。と、青黒い鐵橋に寄せかけた自轉車がある。籠が一つ載つてゐる。そこへまた自轉車でりゅんと來たのが籠にビール瓶の烏打帽である。その鐵橋の下手の側に向うむきに、半シャツの兩腕の中に頭をのせた白い運動帽が一人、そちらの袂に赤屋根が二つ、でこでこの灰色の壁。

牛の聲が、もうおゝゝ。

あ、赤馬が來た。車には濡れた砂利、手綱は紫の褪せはてた尻がひばかりが赤に金である。また來る、また來る。先頭のは、私が避けた前で停ると、箱の底を抜いてじゃじゃじゃと砂利をふり撒く。

蜂の子の實に漆黒な、そして黄と縞の新鮮なのが驚いて土から飛び立つ。蟲の聲がする。そこで二番目の赤馬は鐵橋のそばの雜草をむしりむしりする。眼のうへの鬘には何か鬱金の花粉がついた。

そのこちらの斷層、向うの斷層、風は草生を輝かし輝かしては走つて來る。レエルのそばには赤い鐵材、二三丁先のガアドの上には鶴嘴、シヤベル、白シャツの工夫五、六人。

秋だな、秋、秋秋。

鐵橋を渡つた左の崖のはしには伐りのこされた極めて浅い栗の林がある。地上にへし折られて捨てゝある泥まみれの枝と葉、いが栗。

つづいて、里芋島。トマトは赤くつやつやして、下葉はすでに枯れかけてゐる。箒くさの

剥製の栗鼠

さゝやかな日光室の素木のテーブルの上、窓硝子を透かす午後の日ざしに置かれた剥製の栗鼠である。

褐とやゝ小豆がかつた鼠色のその栗鼠は前かがみに太い尻尾を立て、とまり木のさきから、ちつと一眼で外を凝視してゐる。よく光る眼だ。

ドアが開けてあるので、私の書齋からは、さうした栗鼠の横顔が見えるのである。その頃から胸にかけてまつしろい毛の、さして輝かぬあたりは薄い紫の影が沁みついてゐる。いや、それよりも目だつのは五六本の張つて反つたその頤髯である。その頤髯にはいつも松風や時雨の雲の寂びが濕つてゐたものだ。

もう一昔前のことだが、私が葛飾にゐた頃は、よくさうした寂びのある生きた栗鼠と出あ

つた。真間あたりには殊に栗鼠が群れてゐたやうである。松林の砂地や、赤松の枝などにその太い尻尾を影と動かして、ともすると、つい庭の縁さきなどをつつ走つたりした。丘の多い松戸にもたしかその飼養林があつた。うちの子がある人からこの剥製の栗鼠をもらつた時には、そのとまり木に赤いふたつの烏瓜が引つけてあつた。いかにも秋が深いと思はれた。その烏瓜もしなびて、いつのまにかからからの葉といつしよに捨てられてしまつた。空までがさむざむとして来た。

今、私は大きなデスクの前に廻轉椅子に凭れたまゝ、ぼんやりと、紫の煙草の煙を楽しんでゐる、向うの剥製の栗鼠を眺めて。

よく晴れて、極めて明るい今日の半日を、どうしたら最も楽しめるかといふ、かうした閑かな、わづかな時間でも持つことはこの頃の私には珍らしい。私はまたマッチを擦る。

剥製の栗鼠はいつたい何を眺めてゐるのか。

よく光る目だと私はいつた。まつたくよく光つてゐる。

私は栗鼠の見てゐる窓の外を、私の横の硝子窓から覗いて見る。

十一月十四日、梧桐と篠懸のうつくしい黄葉、まだ緑の残つた銀杏、椎の葉にかがやく日光、いや、それよりもうつすらと霧のかゝつた丘の孟宗、色づいた雑木林、その間からひときは浮き出して見える小豆色の急勾配の屋根、細い煙突、さうして白い鳥の毛のやうな卷雲。盆地の濃い青葱、みづみづしい浅みどりの野菜、子供と鶏。まだある。つい眼の下の黄菊の群れである。咲きかけた白の鮮やかな枇杷の花、さうしておびただしい落葉。

栗鼠の眼はそれらの一望の風景を取りあつめてゐるのである。それがいくらかづつ黄ばみつゝ耀きつゝある。

閑かでいゝなあと思ふ。

私はどうであらう。あまりにいそがしい生活である。私の書齋は散らかし放題で、そこらはまるで工場のやうである。私の後ろの整理棚は五六十の函があつて、小説、隨筆、詩、歌、長歌、民謡、小唄、童謡、散文詩、論文、紀行、俳句、その他、何何何と分類してある。原稿と切抜と、ノオトと保存書類と、「赤い鳥」や「近代風景」や「日光」などのそれぞれの

寄稿や投書、それらでいっぱいになつてゐる。それでもまだまだ今年度の作品の整理もついでないのである。書けば書きつばなしになつてゐる。最近の詩集や歌集の編輯にも手がついでゐない。あわただし過ぎるのである。

こゝには文筆生活者としての悲哀がある。今の私には自分ひとりの清閑を寛々と楽しむ餘裕が與へられてゐない。もう少しは自己の道に専心しえらるゝ時間が酬いられてもいゝやうにも思ふが、ついこの窓の前の黄葉の秋色にもしみじみと眺め惚れる暇とではないのである。芭蕉は寂しさに住する人は寂しさを主人とすといつた、あの心もちにもたまたまにしか會へないのである。

感興を待つて筆を執るといふより、約束の義理に迫つて、強ひて感興を自分で作る事が多い。それでも白熱すると、いつかしらほんたうの無我境にも涵る。然し、一つが濟めばまた一つが来る。居催促の人の一人が歸れば、また他の一人が見える。それにしても同じ感興でそのまゝ續けられるものならばまだしもであるが、詩が果せれば童謡を作らねばならず、童謡の気分はまた論文に轉換されねばならぬ。積極的に動いて行かうとする私にとつてはあ

ゆる表現形式を自己表現の形式とする。それこそ寧ろ望むところではあるが、かう目まぐるしくて、かう酬いられることの薄いにはいさゝか心を寂しくさせられるものがある。物質上の報酬といふことはいたづらに多きを望むべきではないが、相當の生活以上に贅をむさぼる心はさらさら私には無いが、ただ私自身に詩を楽しみ仕事を樂しむ私に最も大切な時間さへがただ僅かにしか得られないことを、私は深く考へさせられるのである。

剝製の栗鼠が羨ましい。ちよつとかう思つて、私は苦笑した。

思ひきつて生活を簡素にしようか。かうも思つて見る。世の煩はしい交際を避け、騒壇からも離れて、ひとりひそかに隠棲しようか。かうも考へて見る。然しそれにしては精力が、氣魂が溢れ過ぎる。爲すべきことも多い。一人の詩人たる以外に、社會人としても處すべきものが、重大なものが私には思はれる。私の現在の年齢として隠棲するには早や過ぎる。私はまだまだこれからだと思つてゐる。

ただ、自己の日常と周囲とをあまりに煩瑣にしないことである。清純にして置きたい。なるべく簡単に、専らに、満ちたものにして置きたい。無用の雜事と面會とに係りたくない。

ただただ藝術の大道を人間の大道を邁進したいばかりである。

私はマッチを擦る。敷島の煙が流れる。

ふと、見ると、赤い太陽が向うの雜木林に沈みかけて、薄ら寒い短日の影があたりに多く隈どつて來るのが感じられる。

ちかりと赤く光るのが栗鼠の眼である。

私的生活の上では、私はあまりに他に深入りしたくないとともに、他の分を過ぎた干渉を受けたくない。時としてはこの剝製の栗鼠のやうに靜かに心を空しくして眺め入りたい。さうしてその眼に他の光を映してゐたいと、つくづく思ふのである。

遠くの火の見る鐵塔には鮮黄の燈がばつちりとともつた。

緑ヶ丘にて

ついこの頃まで、すがすがしい若葉だと眺めてゐたのが、今はもう鬱蒼と茂つた樹木の庭になつた。さうしてちかちかと明るかつた向うの丘の赤屋根も時折り風のあひまにちらちらと見えるだけになつた。盆地の蛙の聲のみが日に増し数殖えて来る。

庭の芝生の割りに去年鉤の手に植込んだ花菖蒲が今年は揃つて紫の花をつけた。芝生にちかに坐ると、その紫の花が眼の前に燕のやうに留つて見える。パンの會の時分に築地の異人館の窓から覗いて、かうした花菖蒲のなかに日本娘が坐つて三味線を弾いてゐた紅毛畫を見たことがあつたが、私は端なくあの異國趣味化された風俗の日本が思ひ出された。

緑ヶ丘から馬込の九十九谷はちやうど桐の花の盛りである。赤や緑の文化住宅の前などは新鮮な棕櫚の花も明り出した。

だが、いよいよこの緑ヶ丘風景ともお別れである。此處を去るのも旬日の間に近まつた。この緑とこの光と、この煙霞と、紫の月と灯の谿谷と、この清楚な家ともお別れである。去るに忍びない未練が、かぎりなくこの眺望を今更にむさぼらせる。何とすがすがしい、さうして柔かな景情だらう。

やつと僅かな一年あまりの此處での生活も私にはかなり豊かなものを恵まれた。つくづく感謝していふと思ふ。ただ何故もつとこの緑の自然を十分に楽しまなかつたか、何故もつとこの郊外を散策しなかつたかといふ感みは深い。

だが、もうすぐに去らねばならない。

これらの窓々から見る門前のヒマラヤ杉、ゆりの木、梧桐、栗、銀杏、椎、枇杷、小竹群、梨の棚ともお別れである。遠い赤松の林とも。

私はいつからともなく高いところに住む習慣がついて了つた。誰やらの云つたこの白秋城ともお別れである。高いところから平地に移るのは何となく墮落するやうな気がするが、今度はその平地に下りるのである。

實はうちの子がこの春から多摩川の成城小學にあがることになつて以來、往復四時間の通學はあまりに痛々しいので、その砧村近くに家を探さうとなつた。餘儀ないことなのである。だがあの小田原急行の沿線にはどうにも恰好な住居が見つからなかつた。それでひとまづ世田ヶ谷の松陰神社前に移ることになつた。世田ヶ谷の家は去年此處へ越す前に話のあつた家なのである。ちやうどまだあいてゐるから是非にも來てほしいとのことであつた。自分たちの住居としては少々大き過ぎる位の邸宅でもあり、何かと憚られたが、留守番代りにでも來てくれといふ話であるので、いづれ簡素な書齋を砧村に建てるまで、も借りようとなつた。世田ヶ谷はかなり埃がひどいやうである。郊外ではあるけれども、前の通りは自動車やトラックや汚穢車の往來が激しい。音響が耳ざはりになる。それを除けばまだ樹木も多いし、畑もある。その家の庭には廣い芝生もある。農園も隣にあるし、白い温室も、赤い虞美人草の花壇も照り輝いてゐる。

どういふ風の生活が私たちの前に來るか、とにかく轉居といふことは家族的旅行である。かう書いてゐる間も、廊下では誰彼が荷造りにいそがしい。

上京以來、一年に一度づつの引越しはちと慌ただしい、自分の家といふものを持たぬ者の自由さあはれさもこゝにある。

かうした時、しみじみ家財は簡素にして置くべきことを思ふ。とにかく荷厄介である。さやうなら、綠ヶ丘。

新居より

「野茨はようございますね。」と妻が茶器を手にしてはひつて来た。

「野茨ぢやないだらう、あれは白薔薇だよ。」と私はまた窓の外を眺めた。

おもての石の門にその白い八重の薔薇が絡んで、それが芝土手の内側へこぼれるばかり咲き明つてゐるのである。

六月下旬の朝、この階上の書齋の窓から目に入る世田ヶ谷風景は鬱蒼たる樹木と中空を横ぎる太い細い電線と碍子だけである。

門前の街頭を續いて来る肥料車の轆音がしきりなくきこえる。かうした牛車のからころは武蔵野の特色の一つであつて、何がなしに野趣が豊かな氣がする。

だが、どうだ、この聳聳音は。

通る、通る、通る、驀進する軍隊のトラックが、野砲が、自動車が、凄まじい装甲車が、二列縦隊の騎馬兵が。

郊外のこの亂擾と喧騒とは全く驚くに足りる。砂塵は捲く、家中は震撼する。まるで大地震と終日直面してゐるやうである。昨日私は上野の博物館の庭内を逍遙したが、雲は白く、樹木は深く閑かであつた。市内にあつては音響はかへつて相殺される。此處ではあたりが静謐なだけに反響が凄まじいのである。

時とすると重砲隊までが拂曉から轟々と續くのである。寝てゐても轉がりさうになる。子供達は地震だと騒ぐ。壁土は落ちる。神経衰弱になりさうである。で、この頃は晝間からしぜんと奥の方へ籠りがちになる。そしてケビンのやうな食堂でトマトや胡瓜ばかりかじつてゐる。

ただ邸内が廣く、樹木も多く、芝生もあり、花壇もあり、畠もあるので、雨の日などはそこから緑にうち煙つて、何かと親しい香氣が流れて来る。

居を移すといふことはとりもなほさず家庭的の旅行だと思はれる。私のやうにいさゝか出

不精な者には、たまたま家族をあげて轉居することはひとつの新鮮な換氣法でないことはな
ら。

この家はかなり大きい、どこか落つきのある簡朴な建築である。けばけばしくなく、質
素に見える。入口の通草の棚の下、ボオチの両端に私たちは鮮紅の薔薇を一鉢づつ置いた。
芝生へ通ふ中門の棚には庚申薔薇が一二の紅を點じてゐる。窓ぎはの壁やストオブの煙突に
は古蒼な蔦かづらがいつばいに匍ひ纏つてゐる。

食堂の前には金網の大鳥籠があつた。それで、早速に紅雀や文鳥や青や黄のセキセイ鸚哥
や、十姉妹を二十羽ばかり買つて来て入れたが、翌朝になつて見ると二三羽は噛み殺され、
鳥の毛は散らばり、その餘の小鳥はすっかり飛び去つてゐた。野犬でも来たのだらう。それ
でまた色々と買つて来たが、いゝ慰めになる。

裏には金魚の池があり、そのそばに鶯鳥の小舎があるが、脚を傷けた汚ない鶯鳥が一羽だ
け、時をり思ひ出したやうにぎやあと啼く。番ひだつたのが犬にとられたさうである。

七面鳥のやうな白い大きな雄鶏と二羽の雌鶏とを、私たちは馬込から一緒に連れて来たが、

その一家族も、移るとすぐ夜半に何かに襲はれた。雌の一羽は背を噛まれて赤裸のやうにな
り、半死半生の態で葡萄棚の下に横つてゐた。他の二羽は人の目にもつかぬ物蔭に立ち竦ん
でゐたのをやつと探し出したが、それからは負傷者に付きつきり、ただおどおどとふるへ
てゐた。ところがまた一昨夜健康な方の雌鶏が噛み殺された。何でも白い大きな野犬が出没
する様子である。物騒なことと思ふ。

この外に居つきの鶏がまた一家族住んでゐるが、これらは案外に幸運である。それだけ女
中たちの憎しみが増す。

奥は純然たる日本の庭で通草の棚があり、石や銅の燈籠があり、つくばひのそばには木賊
が生え、築山には天満宮の小さな鳥居や祠があり、名の知らぬ木の花がちりこぼれ、夏なほ
紅い若葉楓が明るく、幽かな木々のほひが籠つてゐる。

その籬をへだてゝ芝生や四阿屋が見える。薄のかげの夏萩の紅や紫もちらちらしてゐる。
留守居だけで住み荒した庭の手入や、部屋部屋の模様替などで、この六月中は何かとごた
ごたした。移轉の通知も未だ刷らないでゐる譯である。子供たちだけが砧村の成城學園の尋

常科や幼稚部に電車で二三十分で通へるので元氣である。

ただこのあたりは雄大な林や森が多く、畠が廣く、雑草の野つ原が到る處に荒地野菊の花盛りなので、その間を駛る郊外電車はいかにも涼しさうである。しかく田園の香氣が充ち満ちてゐるのである。四方八方にすばらしい散策の地がある。

それに、近くには善良な隣人福士幸次郎君がある。

いつか福士君と、太子堂から、野や丘や林や甘藍畠の野道をあてもなく歩き廻つて、一寸狐につままれさうになつた。一里半もあるいたところで、ふつと小田原急行の豪徳寺に出た。さうしてそのあたりの小さなカフエに立ち寄つて、皿よりも大きな普及版の豚カツにビールでやつと空腹を満したことがあつた。さうして引越しは初夏にかぎるとつくづく思つたことであつた。

世田ヶ谷は野菜が新鮮だといふことである。農園はいくつもあるし、鮎鷹の飛ぶ多摩川もほど近い。郊外電車の各線にも利便が多いので、爽かな新らしい生活が私たちの前に來さうである。

近所には九州や長崎の人たちが多く住んで居り、この家の持主が、郷里の人であり、その監督をしてゐる人も弟の親友だしするので、この頃の私の言葉もいつのまにか柳河辯に戻りつゝある。

緑ヶ丘とは全く變つた生活様式なのもおもしろい。

この年の前半期といふものはほとんど整理物にばかり没頭してゐた私にとつて、この世田ヶ谷の風景がいかに私の創作の窓を開いてくれるかが今から楽しみである。

——「近代風景」昭和三年七月號——

小田原への消息

小田原のあの山莊を、木兎の家を愈々手放すことにした。いつそ傳肇寺に寄進しようかとも思ふ。

半壊のまゝのあの廢屋を見棄てゝからいつのまにか三度目の夏がめぐつて來た。月日の經つのは迅い。

あの頃生れて間もなかつた箕子が、この頃は成城の幼稚園へ通ふやうにもなつたし、その兄の隆太郎の記憶にもあの山海の景勝は次第に煙霞のあなたの微光となりつゝある。あの竹群の空に大きく赤く近づいて去つた火星のやうに、あまりに遠い世界がやがてはかの幻想の視野から忘れられて了ふであらう。

きのふ、傳肇寺當住の千葉満足さんが見えた。その話に、あのブラックの寺も愈々改築されるといふ。山はまた一新されるであらう。榎の木地蔵の日おもてに觀音堂が建ち、堂守の尼僧の住居も、けばけばしく豊かに聳えてゐるといふこともずつと以前に私は聞いた。

人間無常とどまらずといふが、まことにあの小さな山だけのことを思つても、逝くものは逝き、去る者は去つた。ただの六、七年の間にほとんど昔の佛は消えて了つた。残つてゐるのは門前の貧しい屠殺者の後家さんだが、あの子持ちの親切な小母さんにも今は若い大工の養子が來てゐるさうである。まざまざとあの山も代が變つた。

傳肇寺の前住の養母と細君とは私が山を去る以前にあの世の人となつた。それから前住は二人の子と後妻とを連れて走水のさる寺へ移つた。以來杳としてその消息をきかぬ。それよりもあのお婆さんの孫娘が賣られて藝妓に出てゐるのに函根で一度遭つたことがあるが、あのやゝ低脳で色めかしい女性のその後はどうなつたであらう。またちよくちよくと寺に見えて何か油斷のならなかつた檀家惣代のA老人も、和尚とよく取つ組み合をして暴れた雲助上

りの白髯のお爺さんも、たうとう亡くなつたといふ噂が谷中の私にきこえて來た。

私も前の妻と生別したが、今の妻との間に二人の子が生れてから、あの山と別れた。

富豪でよく傲つた東隣の別荘の主人は、その初め私の庭の前を蒼鬱たる竹の藪にして、階上の眺望を、私の詩の楽しみをほとんど私から奪つて了つた。私が去つてからは愈々横暴を逞しうして私の庭の半部を寺の地所から削り、木を植ゑ、四、五段の鐵條網をまで引きめぐらして、私のみならず、寺の當住や檀家や心ある小田原の人たちの公憤を買つたことも淺ましかつたが、それらの取拂ひの懇請や抗議を昂然としてその竹藪で一蹴したI氏は立會のあと、七、八日も経たぬうちに頓死して了つた。それ見る佛罰だと笑止がられて、まださほどの日も過ぎないのに、その長子がまたその別荘で肺患が篤くなつて死んだ。

門前の坂の上のO大將の老夫人が震災で壓死されたのも痛ましかつたが、あの寺の講中で

あり、私の曾てのお同行であつた「よぼよぼ順禮」は、根府川の老婆たちの多くは、未曾有のあの山海嘯で瞬く間に生埋めになつて了つた。

私に好意を寄せて、その宏大な邸内をいつも逍遙さしてくれたI家の別荘番の若い園丁もその弟も、雞を百羽飼つたその友人も、とうにちりぢりにあの山から姿を消した。

うしろの山に王冠のやうに巍々として輝いてゐた閑院宮の圓頂閣もむざんに潰滅して、遂に取り拂はれて了つたが、水の尾道へかゝる、寺のつい上のK氏の別荘も一旦つぶれて再び建つたが、これは番人のなほざりから火を失してきれいに繞け盡してしまつた。

私の露臺から見て風光第一であつたO大將邸の老松の一群も、そのなかばは伐り拂はれて了つた。

あはれなのはその山ばかりではなかつた。あの古典的なうゐらうの八つ棟造りの樓閣も壊

滅した。

舊城の櫓、お濠端の松、時鐘の鐘樓、それらもおほかたは以前の風情を失つた。

ただ板橋の大銀杏のみが、ガアドの向うに、函嶺を背景にして天を摩してゐる。あれこそは小田原の錦繪風景である。

山も變つたが、濱も變つた。

人はなほそれより變つた。

親しかつた人々の誰彼も多くは離散して了つた。震災後、私だけがぼつんと山の上に残されて寂しいと思ふこともあつたが、さうしたのがまた人生の相でもあつたらう。残された私までがまた新に知つた人々を後に残して、東京へ出ると、この三年のうちに三度居を遷へた。

何と、こゝいらの野つ原の荒地野菊の蕃殖力のすばらしさであらう。新鮮なこの夏を、この世田ヶ谷の雄大な森と、また野菜の畑とを、私は朗らかに眺めてゐよう。

これでいゝのである。

——昭和三年七月七日、世田ヶ谷若林の新居にて——

人間群落の中に

植物群落といふ言葉がある。人間群落といふ新語も或は認容されるであらう。

此の人間群落の間を通り過ぎつゝ、私の歩みは果しもない人間群落の林を前方に眺め続け
て行く。

此の憂鬱はいつまで、何處まで続くであらう。続けて行かねばならぬであらう。

新興詩歌の世界では團體としてのプロレタリア・イデオロギイに由つて、その幹部から指
令される。さうした群落的藝術運動は少くとも純一な個の表現を念ずる者にとつては係はり
がない。彼等の意圖は權力に對する反抗乃至ブルジョア階級に對する戦闘、若しくは舊慣の
破壊、新社會創造等にあつて、詩はその宣傳的方便品に過ぎない。私たちは詩人としての個

の完成に徹してこそ、初めておのづからな普^{ふく}が及ぶものと見てゐる。個に調べ個に光らな
ければ何を以つて他と交響し映射し得るであらう。畢竟するに藝術は個のものである。個を
没していゝ筈がない。プロレタリア藝術に於ても眞に光るべくして光るのはその作自身の藝
術價值にあつて、團體運動の戰術には無からう。

藝苑にあつて、人としての親和以外、政治的の結黨と糾合とは純正なる詩境を擾^{みだ}す。本來、
藝術は一人一脈であつて、その餘は追隨と模倣との輝かす副射光である。

たまたま詩歌にあつて連歌連句のごとき一聯の連珠體を遊ぶことはあらう。併しながら此
等は飽までも一聯の節度を重んじ、規律に隨順しての藝術上のわざくれである。連珠の一々
は個に生き、個を潜ましてゐる。その妙味も個々の附合の機微にある。併しながら、また純
粹なる個の第一義としての作品は嚴としてこの我が空にある。

演劇、舞踊、管絃樂、映畫、レビューのごとき総合藝術にあつても、個に磨いて而も全體
としての調和と統制を思はねばならぬ。

ただ私ごとき極端な個性の守持者には、詩の本質よりして既に境涯の自己を一無きものとして愛惜する。

民謡童謡のごとき普遍性の流通を以つて、世に開花すべきものも、詩人は詩人としての個の藝術良心をその詩情を根本に先づ潜めねばならない。徒に四方の流俗と鄭聲ていせいとに迎合すべきでなからう。

個の詩歌の作品が、他の音楽家によつて作曲され、或は畫家によつて描かれ、舞踊家によつて振附され、或は上演される場合があつたとする。かうした時、眞に詩人の作そのものは、その場合詩歌あるのみであることは、その作者によつて眞に痛感される事が實證され得る。いかなる名曲名畫名舞踊たりとも、畢竟はその詩以外の他の藝術であるからである。

人間抒情ならびに自然靜觀の時處を得るに當つて、少くとも個の寂寥に住し得ない者は禍であらう。目前の萩に對して一つ家に遊女も寝たりと口ずさんだ芭蕉も、決してその請はれ

た同行は肯んじなかつた。個の寂心を愛惜したのである。群衆心理はともすると錯誤と輕燥と亂雜とに汚れる。

あまりに多い小禽の群の、あの秋空の中にかにしばしば亂れ落つるかを見よ。

私は私の今日の境涯にあつて、個の自在と個の「時」と個の觀想とを切に切に熱求してゐる。時としては個の癡愚の世界をさへ。

あまりに環境が喧騒し過ぎる、尖端過ぎる、光線と音響とが急速過ぎる。而もまた周圍の眼があまりに好奇に過ぎ、聰明過ぎる。あまりにまた下俗な禮讚と低級の愛慕とを投げつけ過ぎる。認識の不足はその反對の意味にも私を苦笑させる。

出づるにも、入るにも、人々は私の孤獨を守つてくれない。深切過ぎるのである。

街の散策にも青燈の下にも、私は直に發見される。旅にあつても隨伴者歡迎者の夥ただし、群落の中に私は私の一人の「時」その時すら奪はれて了ふ。私は私の詩と歌謡とを通じてあらゆる階級との交渉を自分から避けられないものにして了つた。

何と此の人間の群落の中にあつて、私の内貌は憂鬱であることか。自ら云ふのをかしいが、今の私の苦みはあの光明無常の有名苦である。

あゝ、また誰が私の眞の詩の本體を知つてくれることか。

私はこの春から夏にかけて、滿蒙の曠野に遊び北九州の故郷に歸つた。その前後七十日の間に、ただの一日も、私は私の孤獨の靈魂を自ら慈む日とは無かつた。人々は私を名聞の祭壇にのぼせ、兒童は兒童で分列式をし、酒と、音楽と、色彩と、さうして嬌聲と媚態と、——私は而も朗らかにしてこの人間群落の中を通り過ぎ、通り過ぎつゝ滞りなくあらねばならぬことを、心ひそかに思ふだけでも疲れて了つた。

太刀洗から一氣に飛び、大阪からまた乗り繼いだ旅客輸送機の中で、初めて私はただの一人である私自身を發見したのであつた。私は心から解放された私自身の個體を感謝し、ホッとまた吐息をついた。あゝ、獨りだ。あゝ、獨りだ。

私は漠々たる、果しもない雲海の上空を飛んだ。目も盲ひるほどの白い白い耀き、機は幾度か太陽の副射熱によつて下から持ち上げられた。眞の寂寥感と人間感情とが犇々と身に迫

つて來た。

誰知らぬ谿谷の深處を俯瞰してはまた、理由の無い墜落死にさへ私は衝激された。

私は獨りでありたいのだ。この家も家具も書籍も、今の私には寧ろ重荷過ぎる。

私は新鮮な簡朴な生活に還らねばならぬ。

私は私の「時」を奪ふ訪問者に雑事に悩まされ過ぎる。

私はつくづく無名の世界に會ての清貧を取りかへさねばならぬ。

私には私の一生の仕事が與へられてある。

私はまた進んで私の個を磨き、個に徹する寂寥の林を探さねばならぬ。

私は私の自由を遮る人間群落を突き破つて進まう。

ただ私は私の熱愛しました厭惡する人間群落を、我から避けて卑怯に隠遁しようとは思はぬ。靜中の靜は眞の靜にあらず、動中の靜こそ眞の靜だと古人も曰つた。

私はまさに、此の人間群落の中にあつて私は私の心耳で聴き、私は私の此の心眼をば爛々と見ひらきたいのである。

——「若草」昭和五年十月號——

牧水 逝く

若山牧水君が突如として亡くなつた。肝臓硬變症に口内炎を併發したのだと聞いた。私は告別式の日はその死顔を寢棺の蓋に篋め込んであつた方一尺ばかりの硝子を透かして拜ましてもらつたが、彼はいかにも安らかにやゝ下向きに瞑つてゐた。それは陶然と酒に酔つたままで眠りこけてゐるいつもの寢姿であつた。ただ思つたよりは少々色が白つぽく見えただけであつた。

「いい死顔だ。」

と、私の後ろから山本鼎君が差し覗いた。

亡くなるまで當人もさう重態だと思つてゐなかつたらしい。臨終の前日も爛をさして五合ぐらゐは飲んでゐたさうである。で、遺言ひとつしてゐない。私が行くといふことを聞いて

大喜びで坐蒲團を枕下に出さしたり、酒の用意などをさしてゐたさうであつた。私も氣が氣でなかつたが、逼迫した色々の事情でその日はたうとう行けずにしまつた。意識は明瞭過ぎるくらいで酒もやつてゐると、見舞に行つてもらつた大仁のH君の電話で聞いたのでなにごだ大丈夫だらうと思つたのだつた。その翌朝はもう間にあはぬとの報知を受け取つた。驚愕と痛恨とが私を撲つた。私は一旦發ちかけたのを坐り直して了つた。これからどうしたらいいかといふことが考へられた。

日本歌人協會のこともあつた。それで行くにしても死後の彼に對する私達の態度もうちはせたり、弔文を書いたり、爲すべきことは爲さねばならなかつた。それに或る地方との公人としての公約をその一二日の中に果さねば取り返しのかぬハメに直面してゐたし、生前に會へれば仕事などは放擲しても飛んで行く覺悟はしてゐたが、凡てが過ぎて了つたのだから、濟ますだけは濟まして發つことにした。

告別式の日には私は初めて千本濱の廣々とした——可なり無趣味な——彼の建てた住居を見た。門前の桃畑や、裏の松原や、庭に造つた池や岩から落ちてゐる遣り水の有様なども眺め入つた。鍵の手になつた階下の一室——書齋と隣り合せだといふ——に彼の柩は飾られ、數多くの美々しい花輪や鳥籠が處狭きまでに立て繞らしてあつた。線香が煙り、諸方から來た弔電が山のごとく積まれてもあつた。弔問の知人や門生達は雜踏し、群集は庭にも餘つてゐた。

派出な衣や袈裟がけの僧侶たちは午後二時といふカッチリした時間に見えて、直ぐに讀經にかゝつた。

私は一座の端に縁側の柱に凭れて坐つてゐたが、その場の様子がどうしても我が牧水にはそぐはぬやうに思へた。それに今にも醉顔を嬉しさうに綻らばして、「やあ、來ましたね。」と何處からか出て來さうに思へてならなかつた。で、「これはいつたいどうしたんだね。」とやり返したい氣持も動いた。

著くとすぐに夫人や、牧水の親友であつて私とも親しい山崎斌君などから、彼が随分私を待つてゐたといふことを聽いて、實際黯然としたが、その華やかな騒ぎの中に入り交ると、何か明るい現世的なものが目先にちらちらした。

讀經がひとわたり済むと、和尚に引き添つてゐた伴僧の一人がすぐに後ろを振り向いて、「御焼香を。」と言つた。それで白木の几が庭前にも一脚かゝへ出された。庭にゐた人たちが亂れて來た。

「弔文はどうするんだ。」と私は一二の人たちに耳うちして見た。後でとその人たちは答へたが、座が早くもくづれて了つたので、もうどうにもならなかつた。で、私の番になつて焼香には立つたが、私の讀むべき日本歌人協會の弔文は、そのまま彼の寫眞の下に獻げて、私は黙つて拜禮して引き返すより外はなかつた。弔電の重なるものも委員の手から讀まるべきであつたが、その機會も失はれて了つた。何だか、忘れ物でもしたやうなあつけない感じがしたが、その方が牧水の告別にはかへつて似合しいかも知れなかつた。そのうちに僧侶たちはさつさと引つ込んで了つた。

「田舎の坊主はしようがないな。」と誰かが小聲で憤つた。

焼香はまだ引き續いたが、私たちはその半に失禮して二階に上つた。座には尾上柴舟氏夫妻、太田水穂、齋藤茂吉、尾山篤二郎、土屋文明、石井直三郎、矢代東村等の歌壇の諸君の

顔も並んだ。

暑い日であつた。

ビールが出た。

妙なもので、かうした新しい哀傷の中にも反動的に却つて明るい生氣が感じられるものがある。軽い諧謔も出た。生き残つたものゝ歡びといふものが、故人の死を悲しむ一面に誰の顔にも何か輝いてゐないことはなかつた。

「今度は誰の番だ。」と一人がいつた。

歌壇では最近に島木赤彦、古泉千樞を既に失つてゐた。

一同が私の顔を見た。

私は羊羹とビールをチャンポンに口に入れてゐたが、思はず、「僕は大丈夫だよ。」と笑つた。

牧水——酒——白秋。誰にしても直ぐに聯想するところはこれだ。

いよいよ樞が玄關から擔ぎ出され、人々は倉皇として下に降りた。私は階段のところで、

眼鏡の福永挽歌君の肩にぶつかつた。

「弱つたな。」と私は言つた。挽歌も眼を赤くしてゐたが、「うむ、困つた。」と私を見返つた。

早稲田時代の同級生では曩に安成貞雄を失つてゐる。かう親しかつた周囲からポツリポツリ逝かれたのではといふ氣持が私たち二人をピッタリとくつつけた。

靈柩車を先きにして私達は七八臺の自動車に分乗すると、火災後のわびしい沼津の町を香貫山の方へ、埃をあげてドライブした。鐵橋を渡つて程なくすると右手に、こんもりした枝垂柳が見え、櫻の林が見え、見馴れた白い石の門が見えた。

「あれが若山のもと居た家だよ。」と私は隣に坐つてゐた挽歌に囁いた。

私はその家に二度泊つたことがある。一度は今の妻と婚約中に一人で、一度は結婚後に二人して訪ねた。大きい立派な家であつた。書齋の一方のドアを押すとすぐに廣い湯殿になつてゐた。

「困つた。後はどうなるのだ。」

私は私たちの何臺前かに乗つてゐる夫人や四人の子たちのことがしみじみと考へられた。

「やはり酒が過ぎたんだ、それにこの二三年の無理な旅行も確かに健康を害した。」

私はさう思ふと、彼から家を新築するといふ計畫を聞いた時に、強ひても抑止しようとしたことを思ひ出した。それは私自身にもつくづく懲りてゐた後だつたからである。若山はその爲に可なりその文筆生活の上に無理をした。雑誌の「詩歌時代」を創刊しようとした時にも私は賛成はしなかつた。その當時、小田原の私の山莊に訪ねて來た彼の意氣は大いに昂つてゐた。「文藝春秋」の成功をまざまざと目撃した彼には「詩歌時代」も二萬三萬は容易にはけるつもりであつたらしい。詩、短歌、俳句の連關や總合といふことの爲に奮つて盡さうとする意圖は賛成だし、いゝ事に違ひなかつたが、さうした一般向きの商賣雑誌を刊行することに彼の才能や風格は適してゐさうにも思へなかつた。で、私は止したまへと幾度か留めたが、彼は彼のプランの成果を確信してゐて聴き入れさうにもなかつた。で、仕方がなく、私も民謡の選を引き受けた。

酒に酔つてから、私達の話題は少々濕つぽくなつた。彼はほろりとした。

健康上の不安があるなと直感した。さうして利潤を考へることも何か死後の家族のことに
ついて焦つてゐるのではないかとさへ思はれた。

果然、彼は「詩歌時代」の爲に大損失をした。家のことやこの爲の穴埋めに彼の健康には
無理だと傍目にも思はれた揮毫旅行が引續いた。旅へ出るとつい飲み過ぎ機會が重積する。

彼はまことに酒仙の一人であつた。彼ほど心から酒を楽しんだ人は尠なからう。彼はまた
健脚で獨で山河を跋涉することを何より楽しみとした。彼はよく今西行と呼ばれた。彼は邊
幅を飾らなかつた。彼の性行は淡々として眞率であつた。

さうした彼を遂に禍したものは何であつたか。私はそれを思ふと何がなしに軽い憤滿をさ
へ感じずにはゐられなかつた。

數百の門生に圍繞され、數十の新聞雑誌の選歌に禍されつゝ、しかも彼にはふさはしから
ぬ事業や逼迫した樂しからぬ旅行の連續について、私はどれだけ彼の爲に惜んだらう。牧水
は孤獨である方がほんたうであつた。獨で酒を楽しみ獨で旅を楽しみ獨で歌を楽しむべきで
はなかつたらうか。然しまた考へて見ると、彼には妙に寂しがりやの一面もあつた。彼はそ

の周圍から可なり惱まされながら、それかといつて離れることも手放すことも寂しかつたら
うと思はれた。煩はし過ぎた勞働的選歌も生活の上の問題から致方もなかつたかも知れぬ。
さうは思つて見ても、彼が獨で彼の本質を十分に磨いて行つたら、健康の上からもかうは死
期を早めなかつたらうとさへ口惜しくてならないのである。

火葬場は遠かつた。著くと赤い夾竹桃の盛りであつた。彼の柩は早速に職業的な隱亡たち
の手に、興も無く中央の赤煉瓦の竈の中へ押し込まれ、また固く鐵の扉が閉められた。私た
ちはまたその前で手に手に線香を焚いた。坊さんがその濛々たる煙の中でおきまりのお經を
あげた。

歸る時、沼津の驛に直行する私や山本の乗つてゐる自動車の傍に、夫人や四人の子たちが
寄つて來た。さうして鄭重に挨拶をされた。

それから、またひどい埃をあげあげ、狩野川のへりを疾驅する自動車の中で、私は再び鮮
かな哀傷に捉へられた。

「僕のお父さんはワカヤマ・ボックスンつてんだよ。」

「坊やの、パパ、キタワラ・ハクションだ。」

彼の末の子の富士人君とうちの隆太郎とのかうした三年前の小田原での會話を私は思ひ出した。四歳と三歳ぐらゐだつたらう。

その時、牧水は夫人とその末の子と一緒にだつた。私たちは階上の書齋で水入らずの楽しい夜宴を共にした。海上は風いで月のいゝ晩であつた。

あれつきりだつた、あれが最後の酒興になつて了つた。

「僕も弱くなりましたよ。」とうれしさうな赤い顔をしながらも何か彼は弱々しく笑つた。少し酒に酔つて來ると眼がしらがすぐに涙ぐましくなるやうであつた。

「駄目だ、元氣を出したまへよ。」と私は聲をあげた。だが、私の眼にはメツキリと衰へて見え出した彼の體力が感じられたのだつた。

さうだつたかと私は肯いた。

狩野川の鐵橋の赤い橋桁が見えて來た。

牧水は十數冊の歌集を出しながら、私にはほとんど寄贈してくれなかつた。處女歌集の『海の聲』を上梓しようとした時、私はまだ早いから止せと忠告したことがあつたが、聽いてくれなかつた。その後私が讀んだのは『死か藝術か』と『別離』だけである。その餘は雜誌に載つたのを拾ひ讀みするぐらゐのことであつた。

「なぜ君は歌集を送つてくれないんだい。くだらぬ人にばかりやつて了つて。」と私が怒つたことがあつた。

「君に見せる歌が無いんですよ。」と彼はしようことなしに笑つて見せた。が、實はさういふことにはづぼらなのであつた。それから『山櫻の歌』を送つて寄越した。最後の晚餐から程なくしてであつた。

で、私の讀んだのは甚だ妙いので、委しい批判は全集を通覽した上でないと品隋できないのである。その方が私としても謙讓の道だと思ふ。

私と彼とはそもそもから發足點が違つてゐた。私が彼と初めて早稻田の高等豫科で知つた時、私は歌作を止して、「文庫」に盛んに長篇の詩を書いてゐた。明治三十七年頃だつたら

う。彼は柴舟門に入つて「新聲」に歌を投書してゐた。私たちは穴八幡の下の下宿に一緒に居たが、いさゝか私が先輩格だったので、いつも兄顔をしてゐた。私は射水で彼は牧水と號した。私は時々彼の詠草に朱を入れたりした。

その後、私は新詩社に入り、浪漫的風の詩作にひたり、彼は當時に勃興しかけた自然主義の影響を受けた。當時の新詩社は詩歌の上の一大王國として君臨してゐたので、私たちの矜持も高かつた。ほとんど他派の詩歌などは眼中に置かなかつた。で、友情は元のまゝだつたが二人の世界はいつとなく離れ離れの星雲状態になつた。私には私と密接な一群の詩友ができ、彼には彼の歌の上の友人ができた。従つて私たち二人の話題は詩歌のことから自然に避けるともなく避けられて行つた。熱が昂らなかつた。

ただよく二人は學校をなまけて郊外散歩に出かけた。牧水は獨歩崇拜であつた。彼は武藏野の樸林や日和の丘の裾を響かせてゆく空車の音などに聴き耽つた。

私たちの同宿は半歳ばかりしか續かなかつた。私は家を借り、彼はその後に他へ轉宿した。私たちの交情はそれ以來即かず離れずに進んで來た。彼が雑誌の「創作」を出した時、私

は頼まれて詩の選を引き受けもし、酒興に乗じては一緒に他を驚かしに行つたり、夜ふけの電車を往來で立往生さしたり、無邪氣な野放圖もない酔態を演じなどしたが、我々の親密の程度はいつでももう一步といふところでお互に立ち入れないものがあつた。

私は詩作の傍ら、また歌をも發表するやうになつたが、二人の道はやはり同じではなかつた。かう云つたら世間の人は或は意外にも思ふだらうが、實は啄木の方が牧水よりも私に近かつたのである。啄木の歌は新詩社の風を寧ろ粗雑にしたものであつた。私は同じ歌風から新感覺の官能派を成したが、啄木は官能よりも才氣に勝つた作風で、晩年に思想的になり、わざと亂暴な表現を快とした。だから素人受けがしたのである。死後に彼の受けた一般的の聲譽は寧ろ彼の意外とするところであらう。それよりも「馬鹿な奴らだな。」と地下で笑つてゐる筈だ。彼の才華の煥發は歌よりも詩にあつた。技巧の爛熟も、藝術價值も多くはその方にある。不思議に世間は眇目である。

牧水の歌風はその初め自然主義の系統を引き、つゝましく、さうしてまた感傷的であつた。

このセンチメンタリズムがまた青少年の愛慕を受けた。啄木と違つて牧水はただ歌道に一

向であり、全力をそゝいだ。彼はほれほれと歌ひ耽つた。

後年になつても、彼の歌は玄人受けよりも何か専門外の文壇人あたりに感心された。これは彼の歌風が誰にもわかり易く抒情的であり、自然でのびやかで謙譲であつたのに據るのであらう。初期は感情に溺れてやゝ口をすぼめて歌つたところもあつた。さういふところも氣に入られたかも知れぬ。

だが、忌憚なく言ふと、専門的に見て、虚實の間にもつと深く交流してほしかつた。嚴肅な意味に於ける觀照の度が象徴の域にまで參入しないで、流れたやうである。技巧の上にも微細な苦心をしまないで流した。これは思ふに彼のただに我と歌ひ惚れる歌ごころの美しさからも來るが、二つには彼はあまりに美聲で朗吟が巧み過ぎたのにも據る。彼はあまりに彼の美聲に恍惚として、歌そのものゝ持つ一音一語の本質、感味、連關、調律といふ微細な點について聽かず、自分の聲でその缺點をも朗々と繕つて了つたのである。

この本質的問題について、極めて玄人の間には彼の歌に於ける觀照態度や表現の上に就いて、可なりの異議があり、私もその點ではさしてうまいとは思へなかつた。一首一首の技

巧上の缺點は何かと私にも言へる。ただ、彼は生れた歌人であつた。彼は何のこだわりもなく自由に淡々と歌つた。技巧などはどうでもいゝといふ風であつた。彼は歌ごころの動くまにすらすらと楽しんで歌つた。酒を楽しむと同じやうに楽しんで歌ひ惚れた。つまり慾が無く自然に流露するものを流露さしたのである。さうはなかなかゆかないのである。彼の歌は人麁あたりの嚴肅で高邁な萬葉風でもなく、俊成あたりの香氣の深い幽玄體でもなかつた。やはり西行に最も近かつたであらう。然し感傷味や寂寥感に相似點はあらうが、もつと西行よりも明るく暢達した方面を多分に持つてゐたかと思ふ。

彼の風格は及び易からざるものであり、人物がよく、柄があり、何といつても彼は彼の行き方でよかつたと思はれる。

晩年に至つて、彼の制作力はいつとなく消衰し、幾分たわいがなくなり、歌壇の注視も遠くなり、何となく咲ききつた花の凋むやうに凋みつゝあるやうに見られた。然し彼の歌ひ惚れるその場の態度に就いては以前よりもつと樂になり、淡々ともなり、自在にもなつたやうである。あまり無かつた慾氣がもつと無くなつた。玲瓏たる歌境に入りつゝ、彼は我と歌

と酒とに酔ひながら死んだ。人々は彼の黒くなつた唇を熱い末期の酒でしめした。残るのはもつと生きてゐたらどうなつたかといふ問題である。

いふまでもなく歌壇は惜しい歌人を永遠に失つた。

私は親友の一人を失つた。

その薄暮に、私と山本とは東道のH君と静浦海岸をドライブする自動車の中にあつた。H君の家は伊豆の大仁在吉田にあるので、是非に泊れといふのであつた。四十分後に私たちは土地の豪家である彼の門前に、彼の父親である老主人の出迎ひを受けた。

通された座敷の床の間には、牧水の半折の軸を中央に私の一對の細軸が左右に掛けられてあつた。牧水追悼の意に外ならなかつた。私はまた私の哀傷を新らしくされた。

晚餐の時、私と山本とは一二本でつましく酒を辞退した。お互につくづく考へさせられたのである。H君の母上も席に見えた。さうして話は自然と牧水の上に移つた。

いつか私が彼とこの家に泊つた時、酔つてごろりとなつた彼を眠入らせるつもりで、私は

ねんねんころりんの子守唄をいつまでもいつまでも歌つて、歌ひながら彼の頭を叩き叩きしたさうだ。翌朝見ると牧水の坊主頭は赤く腫れあがつてゐた。かろく叩いたつもりでも時間が長く、私もすっかり酔つぱらつてゐたのである。これはいつもこのH家では一つ話になつてゐるさうである。またその話が出た。

「あれからもう八年にもなりますかなア。」と私はしみじみとした。

——「改造」昭和三年十一月號——